

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

動物と人の話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001811



動物と人の話

100 人間の子どもとライオンの子ども (1)

お話、お話。

わかい女がいた。女は子をうんだ。

さて、人びとは女をおいはらった。女が父無し子をうんだからだ。

さて、人びとは女をおいはらった。女は野原にいった。女は野原にすんだ。女は木の洞にすんだ。そのよこに、ライオンが子どもといた。ライオンも、そのそばで、子どもをうんでいたのだ。

さて、夜があけ、朝になると、女は子どもが乳をのめるように、たべるものをさがしに行く。夜があけ、朝になると、ライオンは野原にはいり、食べ物をさがし、子どもがたべるものを手にいれ、子どもにもってきてやる。母親たちがいつてしまうと、ライオンの子どもが人の子どものところをやってくる。そこに人の子どもがいる。子どもたちはすわって、あそぶ。ライオンの母親がもうすぐかえってくるというときになると、ライオンの子どもははしって、かえっていく。ライオンの子どもは人の子どもをそこにおいておく。

さて、ある日、ライオンの子が、「母さんがきみの母親をみつめて、きみの母親をもつてかえってきてても、ぼくはきみの母親をたべない」という。人の子はライオンの子どもに、「わかった」という。そのうちに、ある日、ライオンは人の子のハンマドゥの母親をみつ

けた。

さて、ライオンはハンマドゥの母親をつかまえて、ころしてしまつた。ライオンはその死体をもつてかえってきた。

さて、ライオンの子どもはハンマドゥに、「なんとということか。きょう、ぼくの母はきみの母親をころしてしまつた」といった。

さて、ライオンの子は、その肉をたべるのをこぼんだ。ライオンの子どもは、人の子に、「よし。でも、だまつておれ。おこるな。母親が足跡をのこし、ぼくと母親の足の大きさをくらべてみて、それがおなじくらいになつたとき、ぼくは母親をころしてやる」といった。人の子はライオンの子どもに、「わかった」といった。人の子はじつとしていた。

さて、ライオンの子どもはいつてしまつた。ライオンの子どもは人がたべるものをさがし、人の子にもってくる。ライオンの子どもと人の子はいっしょにいる。ある日、ライオンの子どもの母親が足跡をのこして、いった。ライオンの子どもはやってきて、自分と母親の足の大きさをくらべてみた。どちらもおなじくらいだった。

さて、ライオンの子と人の子はおおきな穴をほつた。ライオンの子と人の子は火をもつてくると、穴のなかで火をたいた。

さて、ライオンの子と人の子はなにかをもつてきて、穴をおおつた。穴はライオンの母親のとおり道にあつた。

さて、ある日、ライオンの母親がかえつてくるとき、その穴のな

かにおちてしまった。

さて、ライオンの母親は火のなかにおちて、焼け死んでしまった。

さて、人の子はライオンといっしょにいる。ライオンの子是人の子がいるものはなんでももってきてやった。ライオンの子はハンマドゥに、「きょう、きみはぼくに約束をしてほしい。ぼくはきみに舌打ちをしてほしくないんだ」といった。

さて、ある日、人の子はライオンの子に、「よろしい」といった。ライオンの子と人の子はこのようにしていっしょにいる。そのうちに、ハンマドゥはおおきくなり、割礼をうける年頃になった。

さて、ライオンの子是人の子をある老女のところにつれていった。王さまの子どもたちが割礼をうけると、ライオンの子は、「ここにわたしの子どもがいる。わたしはおまえさんにこの子どもと王さまの子どもをいっしょにしてほしいのだ。おまえさんは、子どもたちに割礼をうけさせるのだ」といった。

さて、老女は、「よろしい」というと、そのことを王さまにはなした。老女はハンマドゥを王さまの子どもといっしょにした。人びとはハンマドゥに割礼をさすけた。ハンマドゥは傷がいえるまで、そこにいた。ライオンがハンマドゥのためにしてやらないことはなかつた。

さて、ある日、ハンマドゥが成長すると、ライオンはハンマドゥ

に自分のすきな女をさがすように、ハンマドゥに結婚させるといった。

さて、ハンマドゥはライオンに、「よろしい」といった。ハンマドゥは自分のすきな女をさがした。ライオンはやってくると、ハンマドゥを結婚させた。ライオンはハンマドゥに屋敷をつくってやった。ライオンがハンマドゥにしてやらないことはなかつた。ライオンはハンマドゥによめさんをめとらせた。

さて、ライオンは野原にいくと人をおそい、人のもっているものをとり、ハンマドゥにもってきてやる。

さて、ある日のことだった。夜がふけた。雨がふって、さむかつた。ハンマドゥはよめさんといっしょだった。

さて、ある日、ライオンがやってきた。ライオンは村はずれにやってくる、木に尻をすりつけ、何度もほえるのだった。ハンマドゥはおきあがり、ライオンのために屋敷の入り口をあける。

さて、ライオンはいろいろなものをうばって、ハンマドゥにもってきてやる。ライオンはもうすこしで村につくところだった。ライオンは木に尻をすりつけ、何度もほえた。

さて、ハンマドゥはおきあがって、(舌打ちをすると)「なんだって、あいつはぼくにたいへん肩身のせまいおもいをさせる」といった。

さて、それで、ライオンとハンマドゥの関係がわるくなった。

さて、ハンマドゥはやってくると、屋敷の入り口をあけた。

さて、ライオンは体から力がぬけたままやってきた。ライオンはやってくる、屋敷のなかにはいり、ハンマドゥに、「ハンマドゥよ、ぼくときみとの友情の契りはこれでおしまいだ。きょう、きみとぼくはおしまいだ。きみはぼくにこのようなことをしてくれただ。ぼくはきみにそれをするなどといった。きょう、ぼくときみとの友情の契りはこれでおしまいだ」といった。

さて、ライオンは自分の道のあるいていってしまった。ハンマドゥはいろいろなことをおもいだしているうちに、どうしようもない人間になってしまったとき。

(一九八三年一月二一日、語り手 ハディージャ、ガウンデレにて)

101 人間の子ともライオンの子ども(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。ジャンマ・タボーイエル。

王さまに、一人の娘がいた。娘はちいさいときから、おおきくなるまで、王さまの屋敷でそだった。

さて、ほんとうのこと、娘は屋敷からでて、町のそとをうろつき、お腹がおおきくなってしまう。

さて、だれかが王さまのところに行って、王さまに、「あなたの

お嬢さんはお腹がおおきくなりました。あの人は結婚していません。お腹がおおきくなりました」といった。王さまは、「よろしい。娘をどうしてやっただらう」という。王さまは、「よろしい」というと、太鼓をたたかせた。王さまは、「この町にいるものは、みんなわしのところに縄をもつてこい。縄をもつてきて、縄をつくるのだ」という。村の人たちは縄をどんどんつくっていき、それをつなぎあわせた。昼過ぎに、人びとは娘にでてくるようにいった。娘がでてきて、縄をもつた。人びとは娘に、「この縄をひっぱっていき、もうひっぱれなくなるまで、あるくのをやめてはならない」といった。娘のお腹はおおきくなっていた。娘はすぐにも、子どもをうみそだった。娘はどんなあるいていく。とうとう、自分の父親の領地からでた。娘はいくと、べつの王さまの領地にはいった。娘はその領地からでて、またべつの王さまの領地にはいった。娘は野原のまんなかに入った。縄はもう、ひっぱれなかった。子どもがうまれかけた。

さて、娘はそこにおちついた。娘は子どもをうんだ。ほんとうのこと、娘が子どもをうんだすぐそばで、ライオンも子どもをうんだ。いつも、女は野原のまんなかに行って、苦労をして食べ物さがす。女はもどつてくると、自分の子どもにそれをたべさせる。女は、苦労をして食べ物さがす。女は自分の子どもにそれをたべさせる。

さて、ある日、女はたべるものをさがしにでかけていった。すると、女の子どもは、はって、ライオンの子どもとあそびに行く。ライオンの子どもは、女の子どもに、「いま、母さんがかえってくる。きみをみつけたら、きみをたべてしまおう。かえったほうがよい」という。子どもがかえると、母親がかえっている。母親は落花生、ポアンズー豆などいろいろなものをもってかえってきている。子どもはそれをたべる。こうして、女の子どもはでかけていき、ライオンの子どもとあそぶ。

さて、子どもの母親がそのへんをうろつきにでいくと、ライオンの子どもの母親もでていき、子どもの母親とであり、子どもの母親をころしてしまった。

さて、ライオンの子どもは人の子どもに、「かえっていきなさい。友よ。もうすぐしたら、母親がかえってくる。母親がかえってくる、きみがここにいるのをみつけたら、きみをほってはおかない」という。

さて、人の子どもはかえっていった。昼過ぎになっても、子どもは自分の母親の姿をみなかった。

さて、ライオンはまたしても、どこかにいってしまった。子どもはライオンの子どものところについて、「友よ、きょう、母さんがかえってこなかった。ひよつとしたら、きみの母親が母さんをつかまえたのかもしれない。ぼくにはまったくわからない」という。ラ

ライオンの子どもは、「友よ、こい。みてみる。ここに人の死体がある。きて、みてみる。ひよつとしたら、きみの母親の死体がそこにあるかもしれない」といった。子どもは、「友よ、そこに母さんの死体がよくたわっている。きみの母親が母さんをつけたのだ」といった。ライオンの子どもは人の子どもに、「まかせておけ。ぼくはぼくの母親をころす。二人ですもう、友よ」といった。人の子どもは、「よろしい。文句はない。穴をほろう」といった。人の子どもとライオンの子どもはふかい穴をほり、薪をあつめてきて、穴のなかにそれをつんだ。人の子どもとライオンの子どもは、薪に火をつけた。薪はあかくなった。人の子どもとライオンの子どもはゴザをもってきて、穴のうえにひろげた。ライオンの子どもの母親がかえってくる、そのゴザのうえにすわるといふわけだ。

さて、ライオンの子どもが、「友よ、かえっていけ。ぼくが大声をだすのをきいたら、はしってこい。大声をだすときには、母さんはこの穴のなかにまっている。母さんをころしてしまおう。穴にうめてしまおう。二人ですもう」という。人の子どもは、「よろしい」といった。

さて、人の子どもはかえっていった。ライオンの母親はかえってくる、自分の子どもに、「きて、乳をのみなさい」といった。ライオンの子どもは、「ぼくは、乳をのまない。母さんがこのゴザのうえにすわらないと、乳をのまない」といった。母親がゴザのうえ

にすわると、火のなかにおちていった。ライオンの子どもは、大声をあけて、「友よ、こい」といった。人の子どもとライオンの子どもは穴のところまでやってくる、ライオンの母親の死体のはいつている穴をふさいでしまった。人の子どもとライオンの子どもがすすんでいる。ライオンの子どもがおおきくなった。人の子どももおおきくなった。ライオンの子どもは自分たちのたべるものをさがしていく。動物の肉などいろいろのものを野原にさがしていく。人の子どもとライオンの子どもはいっしょにね、いっしょにのみ、一日中いっしょにいる。そのうちに、人の子どもは割札をうけたくなってきた。人の子どもは、「友よ、村では子どもたちに割札をさずけている。ぼくはどうしたらいいだろう」といった。ライオンの子どもは、「いって、割札をうけなさい」といった。人の子どもはいくと、割札をさずけてくれといった。村人たちは人の子どもに自分たちの子どもといっしょに割札をさずけた。人の子どもは村で子どもたちが元服する日のことをかんがえている。人の子どもはいった。人の子どもは、「友よ、ぼくはどこで服を手にいれたらよいかわからない。子どもたちはみんな服をかつてもらった」といった。ライオンの子どもが、「なんだって、まっている。服を手にいれてやる。あす、きみもこい。あの木のむこうで、きみたちは服をとればよい」といった。人の子どもは、「よし」といった。ライオンは目をまっかにして、道にすわった。人びとが服などをもつてとおりすぎてい

く。人びとは市場にでかけていく。

さて、ライオンは目をまっかにして、あちらのほうでみがまえている。みんな、荷物をすてて、にげていく。ライオンは人の子どもをよんだ。人の子どもはいくと、荷物をあつめて、木のしたにもつていった。さっそく、人の子どもは「ここに子どもの服がある。きて、服をとるのを手伝っておくれ」という。村の人が、「おまえに、だれが服をくれるというのか。どうしようもないものよ」という。人の子どもは、「おいで」という。人びとはいくと、服を頭にもせた。人びとはやってくる、子どもたちに服をさせた。人の子どもにもきせた。人びとは家にかえつてきて、「なんと、あの子どもは野原にすんでいる子どもだ。野原にすんでいる子どもだ」といった。みんなあつちこつちにかえつていった。人の子も、野原にかえつていった。人の子がいくと、ライオンがいた。それからすこしあと、人の子はうなだれていた。ライオンは人の子に、「また、どうしてうなだれているのか」という。人の子は、「ぼくは結婚したい。ぼくはどうしようもない」といった。ライオンは、「よろしい。村にいき、きみがすきな娘をさがしてきて、ぼくにいつておくれ」といった。人の子は村にいつて、さがしたが、王さまの娘しかすきにならなかつた。人の子はいくと、ライオンにそれをつたえた。ライオンは、「娘たちは川にいくか」という。人の子は、「うん」という。ライオンは、「娘たちは川にいくか」という。人の子は、「う

ん」という。ライオンは、「よろしい。その娘はどのような姿をしているのか」という。人の子はライオンにその様子をおしえた。ライオンは、「よろしい。ほくは、いつて、なんとかして、その娘をつかまえる。その娘をとりかえしたものは、その娘と結婚するといったら、きみはやってくるのだ。ほくはきみになにもしない。ほくをおいはらえ。ほくはどっかにいつてしまふ」といった。人の子は、「よろしい。文句はない」といった。ライオンは、「だれも、ほくのところまでくることはできない」という。

さて、そのつぎの日の昼、ライオンはいくと、かくれた。娘たちが川にいき、食器をあらっている。ライオンは王さまの娘の様子をよくみている。

さて、ライオンの幼友たちは村にいった。村のなかで、人びとすわっている。

さて、ライオンは王さまの娘にとびかかり、つれていった。人びとは叫び声をあげた。王さまは太鼓をたたくようにとといった。人びとは太鼓をたたいた。村の人びとがみんなあつまつた。

さて、人びとはいった。槍をもっているものも、投げ槍をもっているものもいる。みんないろいろなものをもっている。人びとは、「王さまの娘がライオンにつかまつた。みんな、いそげ」という。みんなライオンにちかづくが、ライオンが目をむきだすと、もどつていく。人びとは、「ライオンはあちらにいきました。王さま。

ライオンがこうしました。わたしはこうして、ついたので、こうしてさそうとしたのですが」などという。人びとはでかけていき、もどつてくる。そうしているうちに、村の人はみんなもどつてきた。とうとう、王さまは、「あのライオンをたちのかせたものに、わしの娘をやる」といった。みんないつて、おいはらおうとするが、だれもできなかった。

さて、人の子が、「アッラーがあなたにいいことをしてくださいますように。わたしもやってみていいですか」といった。村人が、「なんだつて、おまえはどうしようもないものだ。大人が一生懸命になつても、できないのに。おまえにできるわけではない」という。人の子はいった。ライオンは目をまっかにして、地面をかいていく。人の子はライオンのところまでいくと、「なにをしているのか、おきあがれ」という。ライオンはそこからおきあがり、野原にはいった。

さて、王さまたちは人の子と王さまの娘を結婚させた。ライオンが人の子を結婚させると、王さまは自分の領地を人の子にわけてやった。

さて、人の子がいくと、幼友たちがいた。ライオンは、「さて、これはきみとほくとのあいだだけの話だ。友よ、きみは村にいる。ほくは野原にいる。いまみたいに雨期になり、ほくがきみの屋敷のちかくにきて、ほえると、バターのはいったヒョウタンをもつてで

てきてくれ。きて、ぼくの体にぬっておくれ」という。人の子は、「よろしい」といった。

さて、ある日、雨がふった。ライオンがやってくる、人の子はいって、ライオンにバターをぬってやった。ライオンがやってきたので、人の子はいくと、ライオンにバターをぬってやった。とうとうある日、雨がふり、人の子は自分のよめさんといっしょに話をして、わらっている。ライオンがやってきて、ほえた。人の子は、「なんと、ぼくに迷惑をかけるつもりか」といった。ほんとうのこと、ライオンはそれをきいていた。人の子はいき、バターのはいったヒョウタンを頭にのせて、それをライオンの体にぬろうとした。ライオンは人の子に、「なんだって、友よ。ぬってくれなくてよい。ぼくはきみのいったことをきいた」といった。人の子は、「おい、友よ、ぼくは後悔している。ぼくは二度とあんなことをいわない」といった。ライオンは、「よろしい。文句はない」といった。ライオンと人の子はずっといっしょにいる。

さて、人の子のよめさんが、「あなたはライオンのところにいて、ものをうけとればよい。わたしはライオンのところにはいかない」という。人の子は、「よろしい」といった。王さまが、「あした、略奪戦争に行く」といった。

さて、人の子はライオンを自分の屋敷のなかにつれてかえってきた。人の子はよめさんに、「アッラーの目のまえで、おまえとわし

とのあいだだけの話だけでも、ライオンがいるところにだれもはいらせるな。おまえだけが、食べ物など、なんでももっていつてやるのだ」といった。よめさんは、「よろしい」といった。むこさんが、略奪戦争にいくとすぐに、よめさんはライオンがいると大声をあげた。人びとはライオンをころした。人びとがライオンをころした。人の子は略奪戦争にいき、家にかえってきた。略奪戦争から家にかえってくると、ライオンをみにいった。いくと、ライオンはころされていた。人の子は、「ライオンの死体をどこにすてたのか」といった。人びとは人の子に、「あの乾期のモロコシの畑だ」といった。人の子は短刀をとると、乾期の畑にいった。いくと、ライオンの死体があった。人の子は自分の喉をかききったとき。

お話は、おしまい。糞の蒸し焼きができた。

(一九六九—七〇年、語り手 バーセーウオ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマース、マルアにて)

102 イヌと化け物(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある女はイヌをかっていた。女はイヌを五匹かっていた。一匹はホビロホビロという。一匹はジャバチルガという。一匹はシガシガ
ーロという。一匹はジャーリンドという。一匹はホイライエ

という。

さて、男がやってくる、女は男に服をぬがせ（体をみて）、自分はその男がきらいだという。男がやってくる、女は男に服をぬがせ（体をみて）、その男の体に傷痕があるという。男がやってくる、女は男に服をぬがせ（体をみて）、その男の体に傷痕があるという。

さて、ライオンの化け物はいくと、ホロホロチョウなどからいろいろなものをかきりて、（それを身につけて傷痕のない美男子の姿になり）やってきた。こうして、男がやってきた。女は男に服をぬがせ（体をみて）、その男がすきだといった。女は、この男がすきだといった。

さて、女は肉をいためた。女はニワトリの肉、雌ヤギの肉、雌ヒツジの肉、ウシの肉をいためた。

さて、女は肉をいためた。

さて、女の父親はいくと、娘に、「あの男と結婚するな」といった。女は、とんでもない、この世のなかで、その男だけがすきだといった。

さて、男は女をとった。男はその女をとった。男はでかけるとき、肉をとった。雌ヒツジの肉を一切れと、ウシの肉を一切れと、雌ヤギの肉を一切れと、ニワトリの肉を一切れと、それを袋に入れて、肩からかついだ。男はあるいていく。

さて、女は男のあとをついていくといった。女は男についていった。

さて、二人は野原のまんなかについてた。

さて、男は女に、「わしはここから脇にそれる」といった。男は脇にそれた。女はたちどまり、男の様子をみていた。男は脇にそれて、もどつてくると、女に、「いこう」といった。（男はもとの化け物の姿にもどつていた。）女は、「なんだって、わたしのむこさんはいない。うしろからやってくる」といった。男は、「わしがおまえのむこさんだ」といった。女は、「いいや、わたしのむこさんではない」といった。女は、「わかった」といった。男がやってきて、ウシの肉、雌ヤギの肉、雌ヒツジの肉、ニワトリの肉をすべてだして、女にみせた。

さて、男は、「さあ、いこう」といった。二人はすこしいった。

さて、男はだんだん姿をかえていき、ライオンの化け物になっ

た。

さて、女は自分のイヌに鎖をつけて、つないでおいた。

さて、化け物がやってきた。

さて、男は化け物になつていた。

さて、女はやってくる、ドゥームヤシの木にとびついて、（のぼつていった。）化け物はドゥームヤシの木の根本をほつていく。ドゥームヤシの木がたおれかかる。女はべつのドゥームヤシにとび

つく。そのドゥームヤシの木のたおれかかる。女はべつのドゥームヤシにとびつく。

さて、ドゥームヤシがまもなくなくなりかけた。

さて、女はイヌの名前をよぶ。

「ホビロホビロよ、

シガシガールよ、

(ジャバチルガよ、)

ジャーリンドよ、

ホイラーイエルよ」

さて、イヌは、「あれはご主人さまがさげんでいる声だ」といった。

さて、イヌはおきあがると、戸をたたく。戸はかたい。

さて、シガシガールは齒をむきだして、やってくる、戸をたたいたが、戸はかたかった。

さて、ホイラーイエルがやってきて、両前足で戸にむかって、と

びあがった。とびあがって、戸をたたくと、戸がひらいた。

さて、イヌは鎖をきってしまった。

さて、イヌは声のするほうに行く。女はイヌの名前をうたつてい

る。イヌは女のところについた。

さて、イヌは化け物をつかまえて、たべてしまった。

さて、イヌは、「ご主人さま、おりてください」といった。

さて、化け物の胃にはいつていたものが、「おまえたちの主人に
おりよというのか。おまえたちの主人はおりて、どこに行くのか」
といった。

さて、イヌは化け物の胃にはいつていたものをなめてしまった。
胃にはいつていたものが、「おまえたちの主人におりよというのか。
おまえたちの主人をくつてやる。おまえたちといっしょにくつてや
る」という。イヌは化け物の胃にはいつていたものをなめてしまっ
た。

さて、化け物の骨がとんでいつていた。骨は、「おまえたちの主
人におりよというのか。おまえたちの主人をおまえたちといっしょ
にくつてやる」という。

さて、イヌは骨をなめた。骨をなめてしまうと、イヌは、「ご主
人さま、おりてください」という。骨はなにもいわない。イヌは、
「ご主人さま、おりてください」という。骨はなにもいわない。

さて、女は木からおりて、道があるいついた。三匹は女のまえ
をあるいついた。二匹は女のあとをあるいついた。

さて、女とイヌは村にかえつてきた。

さて、女は村にかえつてくると、雌ウシをころした。女はいく
と、土ナベを二つかつてきた。一つには、水をいれた。もう一つ
で、肉をみんないためた。女はその肉をイヌのために、食器にいれ
てやった。

さて、イヌはその肉をたべた。

さて、女は母親に、「草をかる人（身分のひくい人）がやってきても、その人と結婚する」という。

さて、草をかる人がやってきた。

さて、女はその人と結婚したとき。

お話は、おしまい。

（一九八一年二月一七日、語り手 アジヤム・ハマ・ガーブド、レイ・プーバにて。語り手は、ラカ族であっても、フルフルデ語しかできないという。この話はそだての親、ダーンデーマからきいたという）

103 イヌと化け物(2)

ある女にイヌが二匹いた。ある男がよその土地からやってきて、この女と結婚した。ほんとうのこと、この男はハイエナだった。男はこの女と結婚して、この女をたべようとしていた。男はやってきて、この女と結婚し、自分の土地につれていく。二人はどんどんあるいていった。男はいくと、女に、「おまえはここをいつているか」とたずねる。

女は、「しっている。父親とよろろつく」といった。男は、「おまえはここをいつているか」という。女は、「しっている。母親とよろろつ

く」という。男は、「おまえはここをいつているか」という。女は、「しっている。兄さんたちとよろろつく」という。そのうちに、二人は野原のまんなかいった。男は、「おまえはここをいつているか」という。女は、「しらない」という。男は、「おまえはここをいつているか」という。女は、「しらない」という。男は、「よろしい」といった。男はどこかに、ハイエナの姿にもどりにいった。男はハイエナの姿になるとやってきて、女をたべようとする。女にはイヌが二匹いた。一匹はンバムドゥという。もう一匹はンドウムバムという。女はいくと、木にのぼった。女は木にすわり、自分のイヌとよぶ。

「ンバムドゥよ、ンドウンバムよ。

ンバムドゥよ、化け物をつかまえよ。ンドウンバムよ、化け物をつかまえよ。

ンバムドゥよ、ンドウンバムよ。

ンバムドゥよ、木がかたむく。ンドウンバムよ。

ンバムドゥよ、ンドウンバムよ。

ンバムドゥよ、化け物をつかまえよ。ンドウンバムよ、化け物をつかまえよ。

ンバムドゥよ、化け物をつかまえよ。ンドウンバムよ、化け物をつかまえよ」

イヌたちはおきあがつて、どんどんはしつてくる。ハイエナがもど

つてきて、木の根本をほつていく。ハイエナはパツパツと土をほつていく。木はかたむくが、もとのようになつた。木はまたかたむく。女は自分のイヌをよぶ。

「ンバムドウよ、ンドウンバムよ。」

ンバムドウよ、化け物をつかまえよ。ンドウンバムよ、化け物をつかまえよ。

ンバムドウよ、木がかたむく。ンドウンバムよ。

ンバムドウよ、化け物をつかまえよ……」

ンバムドウとンドウンバムがやってきて、ハイエナをつかまえて、かみころしてしまつた。木はもうすこしで、たおれるかけていた。イヌの主人は木からおりてくると、途中でおりられなくなつた。女は一生懸命になつた。イヌの主人はやつこのことで木からおりてきた。イヌは主人をさきにあるかせて、家につれてかえつていったとさ。

さて、むごさんをえらぶとき、あの人でなくては、この人でなくではなどといつていると、おまえさんのしらない動物がやってきて、おまえと結婚するのだ。

(一九八三年一月二六日、語り手 アスタ・ジョーダ、ガウンデレにて。この話は幼友だちがムプム語でかたるのをきいたという)

104 イヌと化け物 (3)

幼友だちが女のところにやってきた。幼友だちがきたな。幼友だちが女のところにやってきた。女とその幼友だちは夕方まであそんだ。二人は食べ物をつくつてたべた。二人は水をのんだ。二人は小屋にはいったではないか。そこに女のイヌがねそべっている。そこに女のイヌがねそべっているな。一匹は、ダマルマレという。一匹は、ダーリールという。もう一匹は、サムサマールという。イヌは杭につないである。もう一匹は、ハビルハビルという。イヌは四匹ではないか。イヌがねそべっている。じつは、女の幼友だちは化け物だつた。幼友だちはおきあがり、女をたべようとする。幼友だちはハイエナのようにたべる。幼友だちはハイエナだつた。幼友だちはおきあがり、女をたべようとする。

さて、イヌはウーツとほえる。幼友だちはうしろにもどつて、よこになる。幼友だちは、「なんなの、そのイヌはどうして、こんなにわたしをこまらせるのか。わたしはうごくこともできない」という。女は、「そんなことはない」といった。幼友だちは、またねたふりをする。幼友だちは、イヌをみる。とうとう、幼友だちは女をおそつて、たべようとする。

さて、イヌはウーツとうなる。女と幼友だちはそこで、夜をすごした。とうとう、夜があげかける。幼友だちはイヌにつかまえられ

るとおもった。

さて、幼友たちはイヌのことをそのままにしておいた。二人はねた。夜があけて、朝になって、二人は昼食（むしろ、ランチというべき。午前中につくってたべる）をつくってたべた。二人は昼食をつくってたべた。幼友たちは、「わたしはかえる」といった。女は、「かえるの」といった。幼友たちは、「うん」という。女は幼友たちに、「よろしい」といった。幼友たちは、「わたしについてくるとき、そのイヌを杭につないでおきなさい。ほっておいてはいけない。わたしはいや」といった。女は、「よろしい」といった。幼友たちは、「よろしい」といった。幼友たちは、「あなたのイヌはあれにいる」という。女は、「よろしい」といった。幼友たちは、「イヌを鎖でつないでおきなさい」という。女は、「よろしい。つないでおく」といった。幼友たちがいくときになった。

さて、女はほそい紐をとると、一匹ずつつかまえては、しばった。

さて、女は、あんだ髪の毛をほどくための、鉄でできた一本櫛をととり、それを髪の毛にさした。女は一本櫛をととり、それを髪の毛にさすと、「いきましよう」といった。幼友たちは、「あなたのイヌはどうしたの」という。女は、「つないでおいた」といった。幼友たちは、「小屋の戸をしめておいたか」という。女は、「しめておいた」といった。二人はでかけていった。女が、「友よ、一人でかえ

るか」という。幼友たちは、「なんだって、もうすこしわたしについてきておくれ」という。女は、「気をつけていきなさい」という。幼友たちは、「なんだって、もうすこしいきましよう」という。とうとう、二人は野原のまんなかについた。幼友たちは女に、「よろしい。すわっていないさい。かえってくる」という。幼友たちは木の茂みのうしろにいった。幼友たちはいくと、もとのハイエナの姿にもどった。女はとおくからハイエナがはしってくるのをみた。

さて、女は髪の毛にさしてある一本櫛をとると、地面になげた。

さて、地面から木がでて、うえにのびていった。

さて、女はその木にのぼって、木のうえにすわった。

さて、ハイエナはやってくると、とびあがる。ハイエナは、「きのうの晩、おまえさんのイヌのおかげで、わたしはおまえさんをたべられなかった。わたしはうらんでいる。おまえさんは、ああ、えらいことになったといいなさい。きょう、おまえさんをひどいめにあわせてやる。おまえさんは木にのぼってにげたつもりなの」という。ハイエナは木にとびかかる。ハイエナはとびかかる。

さて、女は木のうえにたつて、イヌをよぶ。

「ダマルマレよ、

ハビルハビルよ、

サムサマルよ、ダーリールよ。

水をのむ、ちいさな小鳥よ」

女はイヌをよんだ。

「ダマルマレよ、

ハビルハビルよ、

サムサマールよ、ダーリールよ。

水をのむ、ちいさな小鳥よ」

わかるな、わたしは四匹すべての名前をあげている。

「ダマルマレよ、

ハビルハビルよ、

サムサマールよ、ダーリールよ。

水をのむ、ちいさな小鳥よ」

イヌたちは耳をそばだてた。一匹が、「ご主人さまがよんだ。ご主人さまがよんだ」という。イヌは、紐をひきちぎり、おきあがった。四匹みんなおきあがった。女はイヌをよんでいる。

「ダマルマレよ、

ハビルハビルよ、

サムサマールよ、ダーリールよ。

水をのむ、ちいさな小鳥よ」

さて、イヌがどんどんやつてくる。ハイエナが、「きょう、おまえさんをひどいめにあわせてやる。イヌがくるまでに、おまえさんをくつてやる」という。ハイエナはドゥームヤシの木にとびかかり、木にしがみつこうとする。ハイエナは地面にドスンとおちる。

女はイヌをよんでいる。

「ダマルマレよ、

ハビルハビルよ、

サムサマールよ、ダーリールよ。

水をのむ、ちいさな小鳥よ」

イヌたちがやつてきた。ハイエナは、「冗談だよ。わたしはおまえさんになにもしない。わたしはおまえさんをおどしただけだ。イヌのおかげでねられなかったからさ」という。女は、「ハイエナをつかまえなさい」といった。イヌたちはやつてくると、ハイエナにおそいかかり、地面におしたおしてしまった。どのイヌも、ハイエナにいくいつき、肉をくいちぎる。イヌたちはハイエナをたべてしまった。草にのこったハイエナの血が、「おりたら、くつてやる」という。イヌはその血をなめる。ハイエナの爪がとびあがって、おちた。イヌは、「ご主人さま、おりてください」という。草にのこったハイエナの血が、「おりたら、くつてやる」という。イヌはその血をなめる。とうとう、イヌはハイエナをすっかりたべてしまった。血は一滴ものこっていない。ハイエナの影も形もなかった。さて、イヌの主人は木からおりた。女はイヌのまえをあるいていった。イヌは女についていったとき。

(一九八三年一月二五日、語り手 ファートトゥマタ、ガウンデレにて)

105
イヌと化け物(4)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある男がある女と友だちになった。ほんとうのこと、女は化け物だった。

さて、いつも、女は牛乳をもって、男のところへやってきて、「愛人よ、ここにある牛乳をあなたにもってきてあげた」という。

さて、男はその牛乳をうけとって、のむ。こうして、男は女にすこしだけついていく。男は女についていくが、村からとおいところにはいかない。いつも、男の父親は息子に、「わかっているな。ハンマンよ、あの女についていくな。あのような人にはついていくな。おまえは、あの女が人か、野原の動物かわからない。わかるな。あの女は野原から、おまえのところへやってくる。夜でも、あの女はたちあがり、かえっていく。あの女は日暮れどきにおまえのところへきて、かえっていく。おまえはあの女がどこにすんでいるか知らない。よろしい。でも、おまえはいつもあの女についていく。おまえのイヌはこわいイヌだが、鎖ではつなぐな。草でつないでおけ」という。息子は、「よろしい」といった。

さて、ある日、女がやってきた。男は女についていく。

さて、男はふとい針をもった。この針はさすと、ドゥームヤシの木になり、男がのぼれるというわけだ。

さて、女がやってきた。男は女についていく。男はイヌから鎖をはずし、草でつないでおいた。

さて、二人は野原のまんなかについた。男が女に、「おまえさんの着物がおちた」という。女は、「これはここにあった」という。男が、「おまえさんの腰布がおちた」といった。女は、「これはここにあった」という。男は、「おまえさんのヘッド・カーチーフがおちた」という。女は、「これはここにあった」という。男は、「おまえさんのサンダルがおちた」という。女は、「これはここにあった」という。男は、「おまえさんの腕輪がおちた」という。女は、「これはここにあった」という。男は、「おまえさんのイヤリングがおちた」という。女は、「これはここにあった」という。男は、「おまえさんの首飾りがおちた」という。女は、「これはここにあった」という。女はいくと、ころがり、化け物の姿をしてやってくる。男は女が埃をだすのをとおくからみた。女は、「おまえさんはいつも、わたしの牛乳をのんでいる。きょうこそ、わたしはおまえさんをくってやる」といった。

さて、男はふとい針をつきさした。針はドゥームヤシの木になった。男はドゥームヤシの木にのぼった。化け物はやってきて、ドゥームヤシの木の根っこをほっていく。木の根っこが一本のこるだけになり、たおれかけた。男はもう一本の針をさし、そのドゥームヤシの木にうつった。女は、「牛乳をかえしてもらうかわりに、きよ

うこそ、わたしはおまえさんをくつてやる」といった。

さて、女はドウムヤシの木の根っこをほっている。男は自分のイヌをよんだ。

「ホビナ・ホビよ、

ホビ・チルガよ、

タトゥルイエルよ」

一匹のイヌがもう一匹の耳をかみきって、「ご主人さまがわしらをよんでいる。ご主人さまがわしらをよんでいる」といった。残りのイヌが、「なんだって、おまえはうそをついている」という。そのイヌはもとにもどった。ハイエナは木の根っこをほっている。男はいう。

「ホビナ・ホビよ、

ホビ・ンジャマラよ、

ホビ・チルガよ、

タトゥルイエルよ」

ハイエナが、「ボーキリ・キプチ・ココラ」という。イヌが、「ご主人さまがわしらをよんでいる」という。

さて、イヌたちは草でできた紐をたちきって、どんどんはしつていき、やってきた。男はイヌに、「くつてしまえ」といった。イヌたちは化け物をあつというまに食べてしまった。

さて、男は木からおりと、いちばんおおきなイヌにのつた。残

りのイヌがあとを歩いてくる。男は川についた。男はイヌに、「はきだせ」といった。イヌたちはたべたものをみんなはきだした。男はまたイヌにまたがった。男は家にかえると、イヌたちに雄ウシを殺してやった。雄ウシをころすと、その肉をいため、焼いてやった。イヌはその肉をたべ、満腹した。男はイヌをつかまえ、しばつておいた。父親は、「これから、おなじまちがいをおかすな」といったとき。

お話は、おしまい。ウサギの糞の蒸し焼きができた。

(一九七〇年二月二四日、語り手 バーサーウオ村出身のアブド

ウツラーイ・ウスマース、マルアにて)

106 イヌと化け物(5)

ちいさなお話、ちいさなお話。

(ある人が自分の飼っているイヌの名前をよぶ。)

「くろいイヌよ、

ハビルハビルよ、

サムサマールよ、

ダーデイルよ、

ダマルマレよ、

くろい水よ」

このお話は、おしまい。
 (一九八三年一月二五日、語り手 ファートウマタ、ガウンデレ
 にて)

107 傷痕をもつ男がきらいな女 (1)

さて、お話、お話。

この話も、娘のはなし。この娘はハウサ族。娘はたいへんきれいだ。村の人はこの娘が死ぬほど好きだった。村の人たちは娘がすきだった。すなわち、村の人たちは娘にいいよるまえに、死んでしまうほどだった。娘をみれば、すきになった。すなわち、どうしようもなかった。男はふるえるのだった。

さて、娘は体に傷痕のない男としか結婚しないといった。傷痕のないものと結婚するといった。おまえさんは、傷痕というのをしているかい。傷痕のないものと結婚するといった。村人は自分たちの奴隷がハンサムだといった。ほんとうのこと、この人は王さまの奴隷だった。うつくしかった。その名前はダン・シエーリという。ダン・シエーリは娘と結婚しようとする。娘はダン・シエーリの体に傷痕が一つあるといった。娘は結婚をこぼんだ。

さて、へビは娘のことを野原できいた。わかるとおもうが、へビが脱皮すると、体には傷がなかった。体にほんのすこしも傷痕のな

いへビがやってきて、娘と結婚した。娘とへビは野原にいった。へビは男の姿になって、娘と結婚した。自分の穴のへんを、おおきな屋敷にした。ほんとうのこと、屋敷は穴だった。

さて、娘とへビはやってくると、穴にはいった。

さて、屋敷は穴になった。おそろしい大蛇の穴だった。

さて、娘はそこについた。娘とへビはながいあいだそこにいた。村の人たちは娘をさがした。人びとは男が娘をどこにつれていったのかしらなかった。

さて、ダン・シエーリは自分の畑にいった、畑をたがやしている。さて、ダン・シエーリは娘がうたうのをきいた。

「ダン・シエーリよ、ダン・シエーリよ。」

ダン・シエーリよ、父さんの奴隷よ。

ダン・シエーリよ、母さんの奴隷よ」

こうして、ダン・シエーリは自分の名前をきいた。自分の名前をきいた。ダン・シエーリははなした。娘はダン・シエーリの声をきいた。また、娘は奴隷をよんだ。

「ダン・シエーリよ、ダン・シエーリよ。」

ダン・シエーリよ、父さんの奴隷よ。

ダン・シエーリよ、母さんの奴隷よ。

家にかえつたら、ダン・シエーリよ、

父さんと母さんに挨拶しておくれ。

わたしはヘビとやりあっている」

さて、ダン・シェーリは娘にこたえた。

「ダン・シェーリがどうしたか。

ダン・シェーリがどうしたか。

もし、おまえがヘビとやりあっているなら、

物乞いとやりあうことになる（意味不詳）」

さて、ダン・シェーリはたちあがった。ダン・シェーリは家にかえってきた。ダン・シェーリは王さまの娘の声をきいたということ

を王さまたちにいわなかった。ある日、王さまは戦いにでかける。

さて、王さまの奴隷は娘が歌うのをきいた。娘はいった。

「ダン・シェーリよ、ダン・シェーリよ。

ダン・シェーリよ、父さんの奴隷よ。

ダン・シェーリよ、母さんの奴隷よ。

家にかえたら、ダン・シェーリよ、

父さんと母さんに挨拶しておくれ。

わたしはヘビとやりあっている」

そのあとで、奴隷は王さまに、「わたしはあなたの娘の声をききました」といった。王さまは、「うそだ」といった。王さまはそこでたくさんの奴隷たちをころした。

さて、王さまは奴隷たちがうそをついていると聞いた。

さて、娘はもう一度ダン・シェーリをよんだ。人びとは、「お嬢さんがよばれるまでまちなさい」といった。娘はなんどもよんだ。さて、ヘビはかえってくる。ヘビは人の姿になつてかえってくる。

さて、ヘビはもとの姿にもどつて、穴にはいつていった。

さて、ヘビはいくと、娘にまきつき、鎌首をもたげて、娘に、人びとがうごいたら、娘をころすといつた。人びとは、「よし」といった。娘に結婚してもらえなかった男である、ダン・シェーリはヘビをおそれなかった。すなわち、ヘビはダン・シェーリをたたくだけで、かみつけなかった。ダン・シェーリはいつて、ヘビとたたかつた。ダン・シェーリとヘビはずつとたたかつた。昼になった。ダン・シェーリは、「うえをみて、礼拝をしよう」といった。ヘビは、「わしらの村では、うえをみて、礼拝することをしない」といった。ダン・シェーリは、「よし」といった。ヘビが鎌首をもたげた。ヘビが鎌首をもたげて、礼拝しようとした。ダン・シェーリはヘビの首をきつた。ヘビは尾つばをもたげた。ダン・シェーリとヘビは日が暮れたあとまでたたかつた。ヘビは、「うえをみなさい。礼拝をしよう」といった。ダン・シェーリは、「うえをみなさい。わしらは、うえをみることをしない」といった。ダン・シェーリは尾つばをきつた。ダン・シェーリはヘビをやいた。ヘビはとびちつた。ダン・シェーリは娘と結婚したとき。

この話も、このようにおわった。これは、恋愛の話だ。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーマドウ・ルフアアイ、ガウンデレにて。この話は、町で、ハウサ族の娘からきいたという。)

108 傷痕をもつ男がきらいな女 (2)

お話、お話。

さて、ある娘がいた。娘は体に傷痕のない男に結婚してもらおうと
いった。男たちは準備をして、よその村からやってくる。娘は男を
みると、「この人はだめ」という。もう一人の男がやってくる。娘
は男の体に傷痕があるのをみて、「この人はだめ」という。もう一
人の男がやってくる。娘は男の体をみて、「この人はだめ」という。

さて、ある男がたちあがり、やってきた。この男は村のえらい王
子だった。男はいろいろな宝物をもってやってきて、娘と結婚する
という。娘は男をみた、男の体にはまったく傷痕がなかったけれど
も、足にほんのすこしだけ傷痕があった。娘は、「よろしい」とい
った。娘は男の体をすみずみまで、しらべてみる。娘がみると、傷
痕があった。娘は、「ここに傷痕がある」といった。娘はそれがい
やだったので、男と結婚しないことにした。とうとう、娘の家族は
腹をたてる。娘の母親は娘に腹をたてる。ごらんのように、正真正

銘の王子がやってきて、娘と結婚しようとするのに、娘がそれをこ
ばんだからだ。

さて、王子はたちあがり、家にかえっていった。王子は家にかえ
っていった。

さて、野原の怪物が娘の話をきいた。野原の怪物は人の姿にな
り、杖をとると、それを服にかえ、それをきて、ウマにのり、やっ
てきた。

さて、娘は、「そこにわたしのむこさんがいる」といった。

さて、娘はその男が自分と結婚しにきたといった。

さて、娘は、「なんと」といった。娘が男の体を見ると、体には
ほんのすこしも、傷痕がなかった。娘は、この人こそ自分のむこさ
んだといった。

さて、二人は結婚した。二人はでかけていった。二人は野原につ
いた。男は帽子をおとす。娘は、「おまえさんの帽子がおちた」と
いう。男は、「ここにあった」という。男は服をおとす。娘は、「お
まえさんの服がおちた」という。男は、「ここにあった」という。
男は矢筒をおとす。娘は、「おまえさんの矢筒がおちた」という。
男は、「ここにあった」という。男は剣をおとす。娘は、「おまえ
さんの剣がおちた」という。男は、「ここにあった」という。男は
着物をおとす。娘は、「おまえさんの着物がおちた」という。男は、
「ここにあった」という。男は野原の動物の姿にもどった。二人は

道をあるいていった。娘はこわくなってきた。二人は男の村にいった。男の村では、人の肉しかたべなかった。男の村人は旅人たちをおそって、旅人たちのものを屋敷にもってかえる。

さて、男が旅人たちをおそって、その死体をもってかえってくる。娘はなまの野草をつみ、それをにる。村人が人の肉を口にいれて、かみ、娘に、「この村の食べ物をたべなさい」というと、娘は、「よろしい」といい、自分の野草のおかずを口にいれてかむ。そこでは、村人たちは夜、人の肉をたべる。村人たちは旅人をおそうと、夜に、村にかえってくる。村人が肉を口にいれて、かむと、娘は野草のおかずを口にいれて、かむ。村人が肉を口にいれて、かむと、娘は炭を口にいれて、かむ。村人たちが食事をするとき、娘はいつもこのようにする。何年もたったある日のこと、村人たちは娘に、「結婚すると、まえにすすんでいくだけで、うしろにはもどれない」となぞめいたことをいう。娘と男がこの村にかえってくるに、男がうたっていたのも、この歌だった。

さて、娘の弟がたちあがり、姉さんのところにいくといった。弟はある術をしているイスラム教の教師のところに行った。

さて、弟は、「こういうことで、姉さんはある村にいった。その村はこのような村です」といった。

さて、先生は占いをして、娘の弟にどうしたらよいかをみんなおしえた。弟は術をつかって、「きょうこそ、ぼくはいつて、姉さん

をみる。ぼくはいつて、だれをみるというのか。きょう、ぼくはいつて、ぼくの姉さんをみる」といった。先生と娘の弟は一生懸命だった。弟はでかけていった。弟は姉さんのいった村についた。そこにつくと、弟はやってきて、川をわたった。川は、水を火にかけると湯になるように、湯になってにえている。弟は川についた。この川は、人の肉をたべていない人だけがわたることができぬ。

さて、弟は川につくと、「ぼくはまだ人の肉をたべたことがない。ぼくは、どこそこという村まで、だれそれというぼくの姉さんを見に行く」といった。川は、「よろしい」といった。

さて、川は二つにわかれた。弟は川をあるいて、わたった。弟は姉さんのところに、ついた。

さて、弟は男の屋敷についた。男はでかけていた。弟が姉さんのところにつくと、村人たちはみんな野原にでかけていた。そこに太鼓があった。村人はその太鼓をつかって、村の男たちをほめる歌をうたう。

さて、太鼓があった。術をしている先生は弟に、「太鼓がある。たたいたら、どのような音がでるかわかる」といった。太鼓は、「結婚すると、まえにすすんでいくだけで、うしろにはもどれない。結婚したらおしまい」という音をだす。弟が太鼓をとると、太鼓がこのような音をだすことがわかった。

さて、弟は太鼓をどんだたたく。

さて、二人が川につくと、姉さんは、「わたしは人の肉をたべたことがない。わたしはこの村の動物をとったことがない。わたしはこの村の食べ物をたべたことがない。川よ、二つにわかれておくれ。わたしたちはとおりすぎる。わたしがこの口で人の肉をたべていたなら、わたしをおほれさせておくれ」といった。二人は川にいった。

さて、川は二つにわかれた。二人は川をわたった。

さて、村人たちは川岸にたつて、二人をたべるまえに、二人がどうしてわたるかみている。

さて、村人たちはとびはねて、二人のあとをおつていくという。べつの道があるのかい。この川をわたるしかなかった。(村人たちは人の肉をたべたので、この川がわたれなかった。)

さて、姉さんと弟はどんどんにげていく。二人は村についた。

さて、弟は、「姉さんはいへんな格好をしている。村には夜にはいるしかない」といった。

さて、二人の母親は、「よろしい。夜にしよう」といった。家のものたちは姉さんに水浴びさせ、着飾らせ、いらぬ毛をそつてやった。というのは、姉さんはいらぬ毛をそらず、爪をきらず野原の怪物たちのあいだにいたからだ。家のものたちは姉さんのいらぬ毛をそり、爪をきつてやった。人とおなじように、着物をきせてやった。家のものたちは姉さんを村にいった。姉さんと弟は村につ

いた。

さて、二人がつくと、だれもが、「王さまが子どもの姉のうちからいい人をさがし、結婚する」という。王さまとは、この村の王さまのことだ。

さて、村人は子どもの姉さんをさがしている。だれもが、弟に、「おまえさんには姉さんがいない。いついつの日に、わしらは姉を王さまのところにつれていく。王さまがわしらの姉と結婚する」という。そんな調子だった。

さて、弟は自分には姉がないといい、その日、だまつてすわつていた。人びとは、「みんな自分の姉をだしなさい」という。人びとは弟に、「でも、おまえさんには姉さんがいなかったな」といった。

さて、弟は、「わかった」といった。

さて、弟は姉さんに着飾らせて、「まつておくれ。姉さんをいかにせるから」といった。

さて、家のものたちは娘を着飾らせた。家のものたちが娘をだしなした。娘たちのうち、こんな娘は二人といなかった。娘は一番うつくしかった。

さて、家のものたちは娘をつれていった。

さて、王さまは娘をみた。王さまは、「この村で姉さんをもつてくるものはすべて、つれてくるように」といった。

さて、子どもたちは自分の姉をつれてきた。だれも、自分の姉をつれてきて、とおりにすぎる。みんなとおりにすぎる。

さて、人びとはやってきて、王さまのそばでひれふして、王さまに話をした。

さて、人びとが王さまに話をした。娘がとおりにすぎるとき、「この娘が王さまのよめさんになれるか。その娘かな」という。人びとが、「あの娘がきたら、なにかいうことがあるか」という。くだんの娘がとおりにすぎるとき、王さまは、「なんと、この娘こそわしのよめさんになる人だ」といった。すなわち、娘があらわれると、娘のことについて、なにもいおうとせず、なにもいわなかった。人びとはこの娘こそ、王さまのよめさんになる人だとわかつていたからだ。

さて、娘とその家族がやってきた。人びとは娘を王さまの屋敷にいった。王さまが娘の一族すべてにやらないものはなかった。娘は野原の怪物のところからいろいろなものをもってかえていたし、いま、王さまのところにいる。アッラーはこの人たちにいろいろなものをあたえられた。娘たちは庶民だったけれども、こうして、いろいろな財産をもったとき。

(一九八三年一月二三日、語り手 キンギ・アイサトゥ、ガウンデレにて。この話はガウンデレで、老女たちからきいたという)

109 傷痕をもつ男がきらいな女 (3)

お話、お話。

(それにこたえて、聞き手が) お話をしておくれ。

ある男のしたことをしらないか。男にはたくさんの娘があった。

さて、男の娘の一人は、傷痕のある人とは結婚しないといった。

さて、ほかの娘たちはみんな結婚する。一人の娘は傷痕のある人とは結婚しないといい、そのまま結婚せずにいた。

さて、男がやってくると、女はその男をむかえにいき、男の体を見た。

さて、ある日、ターティンデイが体中をなめまわし、やってきた。ターティンデイは着飾り、体中をなめて、きれいな体にして、やってきた。

さて、女は牛乳をとると、たちあがった。女は地面にとどく腰布をまいた。男は女のところに行った。男は小屋にはいつて、すわった。女は男をむかえた。二人は挨拶をした。女は男の親指から頭のさきまで様子を見た。男はすわった。二人は挨拶をした。女はたちあがり、小屋からでていった。女は母親の小屋にいった。女は、「母さん」といって、母親をよんだ。女は、「きょうこそわたしのむこさんがやってきた」といった。母親は、「おまえのむこさんがやってきたって」という。女は、「わたしのむこさんがやってき

た」という。母親は、「よろしい」といった。男は一日中、女のところにいたが、たちあがり、かえるといった。女は自分のものをとると、それをしばった。準備ができた。女はいまむこさんがきたと聞いた。女はむこさんについていくといった。

さて、女の弟がたちあがり、二人についていった。女と男と女の弟がいつしよにいくというのだ。女は、「わたしはおまえとはいかない。結婚がうまくいかないなら、おまえの責任だよ」という。弟は、「いつしよにいく」といった。姉さんは、「いつしよにいかない」という。弟は、「いつしよにいく」という。姉さんは、「いつしよにいかない」という。姉さんは、「いつしよにいく」という。姉さんは、「いつしよにいかない」という。

さて、弟は姉さんについていった。さて、姉さんは弟をほっておいた。弟は姉さんについていった。三人はあるいていった。男が女の家からとおざかると、男の帯がおちた。女は、「おまえさんの帯がおちた」という。男は、「この帯はここにあった」という。そのうちに、帯がみんなおちてしまつて、あとにのこつたのは、体だけになつた。それで、話はおわつた。三人はあるいていった。どんどんあるいていった。とうとう、三人は男のところについた。三人は木をきりたおし、小屋をつくつた。小屋に草をかぶせた。草のうえから縄でしばつた。三人はそこにすんだ。男は自分の仮小屋をたておえた。三人は小屋をたておえた。毎日、姉さんは食べ物をつくと、弟にわたす。弟は姉さんのむこさ

んのところにもつていく。しばらく、それがつづいた。ある日、男はまえの姿にもどつた。

さて、夜があけて、朝になつた。女は食べ物をつくと、弟にわたした。弟はそれをもつていく。弟は男のほうをみて、「あいつは、まえの姿にもどつた。あいつはよこになり、ほえて、地面をころがる」といった。

さて、話はおわつた。弟はおちつくくと、「姉さん、きょうおそれていたものをみた」といった。姉さんは、「わたしはいつておいたでしょう。結婚がうまくいかないなら、おまえの責任だよ」という。姉さんは地面にとどく腰布をとり、それをまき、食べ物もち、でかけていった。女はいった。女が男のほうをみると、男はほえて、地面をころがつている。女はそれを見ると、珓瑯引きの食器をなげすてた。女はやわらかいウンコをしたので、足はウンコだらけになつた。家にかえつてくると、おちついた。姉さんは、「これから、弟よ、どうしたらよいだろう」といった。弟は、「どうしたらよいかわかつている。姉さん」といった。

さて、姉さんは、「にげよう」といった。とうとう、二人はにげていった。オンドリがないた。怪物の姿になつた男はいそいでおきあがると、やつてきて、「おまえたちはどこにいくのか」とたずねた。二人は、「わたしたちはヴィテックスの実をとりに行く」といった。怪物は、「そこでまつておれ。ヴィテックスの実をとつて、

もってきてやる」という。二人はたちどまった。怪物は実をとると、二人にもってきてやった。

さて、怪物はおちついた。二人はにげていった。オンドリがない。怪物はいそいでおきあがると、やってきた。怪物は、「おまえたちはどこに行くのか」とたずねる。二人は、「わたしたちはイチジクをとりに行く」という。怪物は、「イチジクをとって、もってきてやる」という。怪物ははしつていき、実をとると、二人にもってきてやった。怪物はおちついた。

さて、弟は怪物につけられないようにどうしたらよいかかんがえて、「姉さん、どうしたらよいかわかつているか」といった。姉さんは、「わからない」といった。弟は、「十フラン硬貨をとろう。硬貨を糸でしばり、あのオンドリになげてやろう。オンドリが硬貨をのんで、それが喉につまったら、にげよう。わかるな。硬貨が喉からでて、オンドリがなくなまで、ぼくらはとおくにいつているだろう」という。姉さんは、「よろしい」といった。姉さんはどうしたらよいかわからなかった。なにもいわなかった。こわがっていたからだ。弟だけが、しっかりしていた。

さて、弟は硬貨をとると、それを糸でしばった。二人はそれをなげた。オンドリはそれをのみこんだ。硬貨は喉にひっかかった。さて、二人はおおいそぎで、にげていった。二人はどんどんにげていった。とうとう、昼過ぎになるとオンドリの喉から硬貨がはず

れた。オンドリがなくなると、怪物はとびおきて、家にかえってきた。怪物がかえつてくると、家にはだれもいなかった。怪物は二人のあとをおつていった。怪物はどんだんはしつて、二人の足跡の臭いをかぐ。怪物はどんだんはしつて、二人の足跡の臭いをかぐ。とうとう、二人が野原のまんなかにつくと、夕方になった。二人は木にのぼつて、そこでねた。怪物がやつてくると、二人は木にのぼつてい

る。怪物がつくと、二人はすぐそこにいた。さて、怪物はうえをみる。怪物は二人が木のうえにいるのを見た。怪物は木をほりおこした。怪物は木をどんだんほりおこす。怪物は仲間をよぶ。仲間たちがやつてきて、いっばいになった。怪物たちは木をどんだんほりおこした。木はもうすこしで、たおれて、根っこだけになりました。すつかり、夜があけてしまった。

さて、もうおしまいだ。

さて、木はたおれかけた。

さて、木がたおれかけた。二人は、とおくに旅人たちがとおりすぎるのを見た。

さて、弟が姉さんに、「姉さん、わかるね。旅人たちをよぼう。わたしたちの村はあと半分いかなくはならない。あの人たちを使いになさう。あの人たちがやつてくると、たすけてくれるだろう。もうすこしで、くわれてしまう」といった。

さて、話がおわった。

さて、姉さんが、「よろしい。どうしたら、あの人たちを使いにだせるの」といった。弟が、「とにかく、あの人たちを使いになさう」といった。

さて、弟はいった。

「ウク・クワン・クワンカ・ドウ。

ワクワンカ・ドウ。

クダン・クワン・セーマ。

シドーリ・マー。

ドーリ・マー・ンガ・ウッバー・ターウオ。

ドーリ・マー・ンガ・ジャー・ジャー・ターウオ」

さて、旅人がたちどまり、「鳥のようにないのはなんだ」といった。

さて、旅人たちはたちどまった。

さて、旅人たちは、「あれは、鳥か、それとも、人か」という。

さて、旅人たちはたちどまった。

さて、弟はまたしても、うたいはじめた。

さて、弟はいった。

「ウク・クワン・クワンカ・ドウ。

ワクワンカ・ドウ。

クダン・クワン・セーマ。

シドーリ・マー。

ドーリ・マー・ンガ・ウッバー・ターウオ。

ドーリ・マー・ンガ・ジャー・ジャー・ターウオ」

さて、話がおわった。

さて、旅人たちは、「わかるな。あれは人だ。人をよぼう。いそげといった。道で村をみつければ、村人をつれてくるのだ」といった。

さて、旅人たちはいつてしまった。旅人たちは村につくと、「道である人たちであった。その人たちは人をよんでくれといった。怪物たちがあの人たちをくつてしまおうとしている。西にいった人たちだ」といった。

さて、村人たちは、「よろしい」といった。

さて、姉さんと弟の村の人たちが、「よろしい。ひよつとしたら、それはだれそれかもしれない」といった。

さて、村人たちはたちあがり、準備をした。矢筒をもつものや、弓をもつものや、槍をもつものが、たちあがり、怪物を退治しようとした。村人たちは、はしつては、とまり、とうとう二人のところへやってきた。怪物たちがたくさんいた。村人は怪物たちにどんどん矢を射た。ある怪物たちはにげてしまった。ある怪物は村人にあい、村人はそれをころした。村人はなんとかして、二人を木からおろした。

お話は、おしまい。二人は村にかえった。二人が村についた日、

姉さんは傷痕のある男と結婚したとき。

お話は、おしまい。

わたしのお話は、おしまい。

(一九六四年九月、語り手 ジャーファン氏族の人、ガウンデレ地方、ヤルンバンのちかくのババ村にて)

110 傷痕をもつ男がきらいな女(4)

ちいさなお話、ちいさなお話。さて、はやくやりなさい。語り手の頭のうえに、穴のあいたおおきな半截ヒョウタン、バシン。わかるかな。

ある女が、「わたしは体に傷痕のない男としか結婚しない」といった。男たちはみんなこの女のいるとことんやってくる。女はその男の体を見て、「おまえさんには傷痕がある。もどきなさい」という。男たちはみんなやってくるが、女と結婚できなかった。とうとう、野原の怪物が女の話をきいて、やってきた。野原の怪物が女の話をきいて、やってくる、女は怪物のきているものをぬがせ、体を見るが、傷痕がなかった。女は、「わたしはこの人と結婚する」といった。人びとは熱湯をわかった。人びとは男にそれをめとった。男はその熱湯をのんだ。

さて、女と男は結婚した。男は女をつれていく。女の友だちと女

と男がどんどんあるいていく。女たちが野原にはいった。(男の服がおちる。)女は、「おまえさんの服がおちた」という。男は、「それはここにあった」という。(男の帽子がおちる。)女は、「おまえさんの帽子がおちた」という。男は、「それはここにあった」という。男の体につけていたものがすべておちてしまった。男はいくと、アリの巣のなかでころがり、もとのおおきな怪物の姿になった。怪物は、「ジャプーリ・ジャプーリ、わたしはいった。ジャプーリ、獣の足が人の足になった。ジャプーリ、人の足が獣の足になった」という。怪物は女とその友だちをさきにあるかせた。怪物の屋敷のそとにいくと、そこに人の歯があった。

さて、小屋の屋根は人の毛でふいてあった。水ガメは頭蓋骨だった。いろいろなものがあった。わかるな。

さて、怪物は女に、「あすの朝、おまえはおまえの体を料理しておくのだ」といった。怪物はどこかにいってしまった。つぎの朝、怪物がやってくると、女たちははげっていた。女たちがはげたので、怪物は女たちをつけていった。怪物は野原のまんなかにいき、女たちにおいついた。怪物は、「これから、ふたたびにげたら、くつてしまつてやる」といった。そのつぎのつぎの日、女たちははげた。さて、怪物は女たちをたべてしまったとき。

お話は、すべておしまい。

(一九六九年、語り手 バーサーウオ村出身のアブドゥツ

111 娘とハンセン病者(1)

ある娘がいた。娘はみにくい男がいやだといった。若者は、うつくしくないといやだといった。若者でないといやだといった。

さて、ハンセン病者がある地方からでてきて、娘にいいよった。ハンセン病者はやってきて、娘にいいよった。娘はハンセン病者を見ると、何度も身震いをした。娘はその男がすきだった。ハンセン病者がやってきた。ハンセン病者は姿をかえて、着飾った。ハンセン病者はヘビの体からしなやかさをもらった。野露から眉毛をもらった。マメのところにいき、その莢から爪をもらった。ツバメのところにいき、黒光りする寛衣をもらった。ハンセン病者はこれらのものをとると、やってきた。

さて、娘はこの男がすきになった。娘には弟がいて、姉さんのむこさんといっしょにいくといっした。弟は、「姉さんといく」といっした。姉さんは、「おまえとはいかない。おまえは好き勝手なことをする。おまえがいくと、わたしのむこさんに迷惑をかける」といっした。姉さんは弟といくのをこぼんだ。

さて、こうして、男は娘をつれていった。

さて、男は男の子の姉さんをつれていった。男と女はどんだんあ

るいていった。弟はハエになると、姉さんの荷物にとまった。男と姉さんは野原についた。姉さんが、「あなたの服がおちた」という。男は、「これはここにあった」という。姉さんが、「あなたの帽子がおちた」という。男は、「これはここにあった」という。姉さんが、「おちた」という。男は、「これはここにあった」という。二人は林についた。男は自分の屋敷にちかづいた。男は林にはいった。男は、かりてきたものをとってしまった。男は（ハンセン病者の姿にもどり）ひよっこひよっこことびはねる。よめさんはその男に、「もしもし、おまえさんはわたしのきれいなむこさんがこの林にはいったいくのをみなかったかい」といっした。男は、「きれいな男がどうしたというのか。そこをのきなさい。いこう。その男はわしだ。そこをのきなさい」という。男はよめさんと（ハエから人の姿にもどった）よめさんの弟をさきにあるかせた。

さて、三人はあるいていった。三人は男の村についた。その村はハンセン病者の村で、みんなハンセン病者だった。女の弟はワシをつかまえた。ワシは男の子に、「どうか、わたしをころさないで、はなしておくれ。そのうちに、わたしはおまえさんの役にたつだろう」といっした。

さて、男の子はワシをはなした。ワシはどこかにいってしまった。男とよめさんとよめさんの弟はそこ（川の入り口）についた。よめさんの弟は、フィンガーピアノ（親指ピアノ）、サンザともい

う。)をとると、入り口のまんなかすわり、それをひきながら、ずつと自分の姉さんをたてる歌をうたう。そのうちに、夜があげて、朝になった。夜があげて、朝になると、男の子はフィンガーピアノをとり、歌をうたう。人びとがやってきて、すわった。ハンセン病者はやつてきて、おどる。男の子はフィンガーピアノをひいている。

「姉さん、結婚運のいい人よ、でて、みなさい。」

ナイフをもって、でて、みなさい。

コア、ナイフをもって、でて、みなさい。

姉さん、結婚運のいい人よ、でて、みなさい。

コア、ナイフをもって、でて、みなさい。

ふるい袋にはいったさめたカタガユ、ふるいざるにはいった

さめたカタガユ。

ナイフをもって、でて、みなさい。

姉さん、結婚運のいい人よ、でて、みなさい」

ハンセン病者はひよこひよことおどっている。そのうちに、ハンセン病者はつかれてきた。日がぼつてきて、人をたべるときになつた。

さて、男の子はすわって、フィンガーピアノをひいている。

「ワシよ、ウオー・カワデイ・カワデイ・ワリ。

カワデイ・ワシよ、ファン・ラー・ファン。

カワデイ・カワデイ・ワリ。

カワデイ、ワシよ、ウオー・カワデイ・カワデイ・ワリ。

カワデイ・ワシよ、ファン・ラー・ファン。

カワデイ・ラー・カワデイ・ワリ。

カワデイ、ワシよ、ウオー・カワデイ・カワデイ・ワリ」

ワシがバサバサと羽音をさせながら、やつてきた。弟と姉さんはそとにすわっている。ハンセン病者たちは二人をころして、たべようとした。ワシはやつてきた。ワシはやつてくると、姉さんをさらうと、片方の脇にはさんだ。弟をさらうと、もう一方の脇にはさんだ。ワシはおきあがると、小屋のうえにとまった。小屋のうえにとまった。ハンセン病者たちは小屋に火をつけた。もう一つの小屋に火をつけた。またしても、もう一つの小屋に火をつけた。ハンセン病者たちはどんだん火をつけていき、村をみんなやいてしまった。ハンセン病者たちが村をみんなやいてしまうと、ワシはおきあがり、ハンセン病者たちの村にあるかわいた木にとまった。ハンセン病者たちはこの木をカンカンときりつづけている。(ハンセン病者はこの木に火をつける。)木はもえて、たおれる。ワシはバサバサと羽音をさせながら、とんでいった。ワシは二人を母親と父親のもとにつれていったとき。

これも、これでおしまい。

(一九八三年一月二六日、語り手 アスタ・ジョーダ、ガウンデ

レにて。この話は父方の従姉妹からきいたという)

112 娘とハンセン病者(2)

あるところに娘がいる。娘は体に傷痕のない男のほか、この世で
すきなものはいないといった。

さて、男がやってくる。娘は、「この人には傷痕がある」という。
もう一人の男がやってくる。娘は、「この人には傷痕がある」とい
う。もう一人の男がやってくる。娘は、「この人には傷痕がある」
という。

さて、ある日、ある男がたちあがり、着飾った。ほんとうのこ
と、この男はハンセン病者だった。男が体につけないものはなかつ
た。男はたちあがり、やってきた。男がまだ道にいるとき、娘の母
親は、「穀物倉にのぼって、カタガユの捏ね棒をとっておくれ。カ
タガユをこねる」といった。娘は穀物倉にのぼって、カタガユの捏
ね棒をとろうとしている。

さて、娘はその男がおくからやってくるのをみた。娘は、「母
さん、きょう、わたしのむこさんがやってくる。きょう、わたしは
いってしまふ」といった。母親は、「おねがい。まっつて、食事をし
なさい」といった。娘は、いいえ、それはいやといった。

さて、男がやってきた。男は娘をつれると、いってしまつた。二

人はとおくにいった。二人は野原のまんなかに入った。娘は男がサ
ンダルをぬぎすてるのをみる。娘は、「あなた、あなたは、そこに
あなたのサンダルをぬぎすてた」という。男は、「これはここにあ
つた」という。男は服をぬぎすてる。娘は、「あなたはそこにあな
たの服をぬぎすてた」という。男は、「これはここにあつた」とい
う。男はズボンもぬぎすてる。娘は、「あなたはそこにあなたのズ
ボンをぬぎすてた」という。男は、「これはここにあつた」という。
男は、眼鏡をはずし、ほかす。娘は、「あなたはそこにあなたの眼
鏡をほかした」という。男は、「これはここにあつた」という。と
うとう、男は体につけていたものをすべてほかした。体中、傷だら
けだった。娘の妹はちいさかったけれども、娘と男がでていくとき
から、二人のあとをつけていくといった。娘は妹にあとをつけられ
るのがいやだといった。

さて、娘と男は野原のまんなかについた。そのとき、妹は術をつ
かつて、娘と男のあいだにたつた。

さて、娘は、「なんだつて、妹よ」といった。

さて、娘と妹と男はハンセン病者の村についた。男は川の入り口
にたつていて、「おお」といって、むらにいますべてのハンセン病
者たちをあつめた。男は、「きょう、肉を手にいれた」といった。

さて、ハンセン病者たちがやってきた。

さて、娘の妹は男に、「わたしたちの村では、人をたべるなら、

まずよくくわせて、ふとらせてからたべる。そうして、人をたべる」といった。

さて、村人たちは、「よろしい」といった。妹はある日、鳥をかまえた。

さて、鳥は女の子に、「将来のために、わたしをはなしておくれ」といった。

さて、女の子は鳥をはなした。鳥はどこかにいってしまった。女の子は娘の妹だ。

さて、村人たちは娘と妹をつれていき、いっしょに小屋にいれた。村人たちは手にいれたものなんでも、二人にやる。手にいれたものはなんでも、二人にやる。とうとう、二人はふとっていく。

さて、村人たちが、「きょう、くってやる」といった。

さて、妹は、「なんだって、わたしたちの村では、人をたべるときにはこうするんだ。まず、お祭りをして、おどってからたべる」といった。

さて、そのつぎの日、村人たちは二人をたべることになった。そのまえの日の朝、村人たちはおおきな木のしたにいて、たった。村人たちは太鼓をだし、女の子にわたした。村人たちは女の子に太鼓をたたけといた。

さて、女の子は太鼓をうけとり、太鼓をたたいている。ほんとうのこと、女の子は太鼓をたたいているあいだずっと、まえにつかま

えて、にがしてやった鳥をよんでいるのだった。女の子は、「わたしの鳥よ、きょう、わたしはこういうめにあっている。わたしの鳥よ、わたしはこういうめにあっている」といった。

さて、村人たちは一晩中おどっている。村人たちは女の子がただの歌をうたっているものとおもっている。ほんとうのこと、女の子は鳥をよんでいるのだった。

さて、女の子は鳥がバサバサとんでくるのをみた。鳥はやってくと、女の子のところにおりた。

さて、村人たちは、「なんだ。その鳥をとって、わしらにくれ。わしらはそれをたべる」といった。

さて、女の子は太鼓をたたいている。たたくのをやめない。

さて、鳥はうえのほうにもどっていき、調子をとのえた。羽をととのえ、とんでくると、女の子と姉さんをさらって、羽のしたでしっかりとつかんだ。鳥はうえのほうにとんでいった。

さて、村人は女の子がたたいていた太鼓がもどってくるのをみた。

さて、村人は、「なんだって、みてみる。二人はもどってくる。二人はおちてくる。おちてくる」といった。

さて、太鼓はコンコンと地面におちてきた。鳥はとんでいき、村長の小屋のうえにとまった。村人はマツチをすって、その小屋に火をつけた。村人は鳥をやくといた。鳥はとんでいき、べつ

の小屋のうえにとまった。村人はマツチをすって、その小屋に火をつけた。鳥はとんでいき、べつ的小屋のうえにとまった。村人はマツチをすって、その小屋に火をつけた。村人は村にあった小屋をみんなもやしてしまった。村人は鳥に手がとどかなかつた。鳥はとんでいくと、木にとまった。村人は鳥に手がとどかなかつた。鳥はとんでいってしまい、娘たちを母親の小屋の入り口におろした。鳥は、「わたしたちの友情の契りはこれでおわりだ。こういうこともあるから、わたしはおまえさんに、おまえさんがわたしをつかまえたとき、将来のために、わたしをはなしておくれ、といったのだ」といったとき。

お話は、みじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二一日、語り手 ハデイージャ、ガウンデレにて)

113 娘とハンセン病者(3)

さて、ある女がきれいな娘をうんだ。

さて、女は娘をうんだ。娘の母親は死んでしまって、娘をあとにのこした。娘は娘のおばあさんにわたされた。おばあさんは、娘をそだてた。娘はおおきくなった。とうとう、娘は結婚してよい年頃になった。

さて、男たちがやってきた。娘はその男たちをすきになれなかつた。男たちがやってきた。娘はその男たちをすきになれなかつた。男たちがやってきた。娘はその男たちをすきになれなかつた。男たちがやってきた。娘はその男たちをすきになれなかつた。男たちがやってきた。娘はその男たちをすきになれなかつた。

さて、ハンセン病者の男がやってきた。男はカムリツルの羽をかりた。カムリツルの羽をかりた。カムリツルのところで、羽をかりてやってきた。

さて、ハンセン病者の男はやってきた。

さて、男がやってきた。

さて、娘はカムリツルの羽がきれいなので、「そこにわたしの結婚する男がいる。そこにわたしの結婚する男がいる。そこにわたしの結婚する男がいる。そこにわたしの結婚する男がいる。そこにわたしの結婚する男がいる」といった。ハンセン病者の男がカムリツルの羽をかりて、体をきれいにしたのだつた。娘はいくと、もどつてきた。娘は着飾つた。娘は妹に飾をもたせて、水汲みにやらせた。妹はいつて、水をくむが、水がもれる。いくら水をくんでも、水がもれる。男と娘はむこうにいった。

さて、娘は食べ物をいそいでつくつた。

さて、男はその食べ物をたべてしまった。二人は自分たちの道があるいていった。娘はすこしかタガユをとり、妹のために石のうえ

においておいた。妹がかえつてくると、姉さんはどこかにいってしまつて、いなかつた。

さて、妹はねえさんがどこにいったのかといつた。娘は男といつてしまつた。娘は男とどんでんあるいていつた。とうとう、とおくにいつた。

さて、男は道をすこしそれて、カムリツルの羽をとり、身につけていたものをみんなとつた。

さて、男がでてきた。娘は、自分のむこさんはきれいだったが、ハンセン病者になつたといつた。娘は、ああ、むこさんがいなくなつたといつた。むこさんがいなくなつたといつた。男は、「わしが、おまえのむこさんだ。わしが、おまえのむこさんだ。べつの男だなどというな」といつた。

さて、男は、「おまえはわしに食べ物をつくってくれた。わしはそれをたべていないか。おまえは妹に飾をもたせて、水汲みにやらせた。それで、おまえのむこさんはわしでないのか」といつた。

さて、男は娘をさきにあるかせた。二人はどんでんすすんでいつた。

さて、ハンセン病者の男はすゝい槍をもつてでていつた。男は、「なんだつて、でなさい。でなさい」といつた。娘がでて、はしつていくと、リスがいた。リスは、「なんだつて、よこになれ。あ

つがきたら、モロコシをうつときにつかう棒であいつをうたないといふことがあるか」といつた。男はどんでんやつてくる。

さて、男がでてきた。

さて、リスは男の頭を棒でどすんとたたいた。

さて、男は死んでしまつたとき。

お話は、おしまい。

(一九八一年二月一六日、語り手 オマル・セイニ・トービ・ムーサ・ラベヤ、レイ・ブーバにて。オマルの父親はモノ族、母親はムブム族。オマルは、フルフルデ語よりムブム語がよくわかる。オマルはレイ・ブーバ地方のトゥボロで二三歳までいた。この話は、兄さんのボルがフルフルデ語でかたるのを、ガウンデレで書いたという)

114 娘とライオン

ある娘がいた。娘はやつてきて、自分のためにそこにあるバオバブの木から実をとつてくれたもののほか、だれとも結婚しないといつた。ウマにのつて、とびあがり、バオバブの実をとらなければならぬといつた。一人の男がやつてきて、とびあがるが、おちて、骨をおつてしまう。べつの男がやつてきて、とびあがるが、おちて、骨をおつてしまう。べつの男がやつてきて、とびあがるが、お

ちて、骨をおつてしまふ。

さて、ある日、一人の男がやってきて、とびあがり、木のうえになつてゐるバオバブの実をとつた。

さて、娘は、「母さん、きょうこそ、わたしのむこさんがやってきた」といった。

さて、男は娘と結婚し、娘をつれていってしまった。

さて、娘は男の屋敷についた。二人が男の屋敷につくと、男の屋敷の砂は人の齒だった。水ガメは骸骨だった。骸骨に穴をあけ、水がいてあつた。柄杓は人の腕の骨だった。屋敷の仕切は人の腰の骨だった。男の屋敷にあるものはすべて、人の体にあるものがつたつてあつた。

さて、おおきな角が男の屋敷の入り口の小屋にたつていた。この角は屋敷にやってきたものごとをすべて男につたえるのだった。

さて、夜があけて、朝になると、男はでかける。男はいくと、どんどん自分のたべる人をころしていく。人がたべる野原の動物をえらび、どんどんころしていき、それを自分のよめさんにもつてきてやる。

さて、ある日、娘の母親がたちあがり、やってくる。娘の母親がたちあがり、やってきて、「おまえたちの屋敷の砂はなんと」といった。

さて、娘ははしつていき、母親の口をふさいだ。

さて、娘と母親は台所にはいつて、すわつた。

さて、娘は、「母さん、なにもいわないでおくれ。わかる。入り口の小屋にある角は、屋敷にやってきたものごとをすべてあの人につたえるの」といった。

さて、男が屋敷についた。男は人の死体をドスンとおろした。男はやってきて、たちどまり、いう。

「客は、なんといつたか」

角がいう。

「客は、おまえさんの屋敷の砂はきれいといつた」

男がいう。

「客は、なんといつたか」

角がいう。

「客は、おまえさんの屋敷の砂はきれいといつた。」

客は、おまえさんの屋敷の水ガメはきれいといつた。

客は、おまえさんの屋敷の仕切はきれいといつた」

男はよこになつて、わらつてゐる。男は屋敷につくと、よめさんがいた。男はよめさんに、「きょう、だれがここにきたのか」といつた。よめさんは男に、「母さんがきたの」といつた。

さて、よめさんは、母親を穀物倉のなかにかくした。男が穀物倉にいれていないものはなかつた。この世の宝はすべて、そこにいれていつた。

さて、娘は、「ここにある穀物倉をおまえさんの義理の母親のところにもっていき、あるいていく。男はいう。男は穀物倉を頭にのせて、野原のまんなかをあるいていく。とうとう、男は義理の母親の小屋の入り口についた。男は穀物倉をおろした。男はもときたほうにあるいていき、家にかえってきた。」

さて、娘の父親のもう一人のよめさんがそれをみて、自分もいくと、男はもときたほうにあるいていき、家にかえってきた。」

さて、娘の父親のもう一人のよめさんはたちあがって、やってきか。娘の父親のもう一人のよめさんはつくなり、「なんだって、屋敷の砂は人の齒ではないか。それなのに、おまえはここにいてのか。どうして、おまえはこんな屋敷にいてのか」という。娘の父親のもう一人のよめさんは娘にこういった。娘は、はしっていき、父親のもう一人のよめさんの口をふさいだ。娘の父親のもう一人のよめさんがいわないことはなかった。角は娘の父親のもう一人のよめさんがいったことをすべてきいておいた。娘の父親のもう一人のよめさんは娘のところについた。娘は娘の父親のもう一人のよめさんをいそいで穀物倉のなかくした。

さて、娘の父親のもう一人のよめさんは頭に一本櫛をさして

た。娘の夫である野原の怪物がついた。怪物はつくくと、角に、「ここにだれがきたのか」とたずねた。角は、「客がやってきて、

『屋敷の砂はきたない。』

屋敷の水ガメはきたない。

屋敷の仕切はきたない』

と、男はすわって、それをたべている。男はよめさんのところにつけてこなかった。

さて、男がやってくる、よめさんは男に、「ここにある穀物倉をおまえさんの義理の母親のところにもっていき、あるいていく。男は穀物倉を頭にのせた。そこで娘はにげていった。かくれながら、野原をよこぎった。娘は男のもとにもどると、まちがいなくころされることをしっていた。娘の父親のもう一人のよめさんはいへん悪い人だった。男は穀物倉を頭にのせて、あるいていく。娘の父親のもう一人のよめさんは頭から一本櫛（千枚通し）をぬきとり、穀物倉の底をついた。そのうちに、櫛はライオンの頭にとどいた。ライオンは穀物倉をふり、もどり、穀物倉を地面においた。またしても、ライオンはあるいていく。ずいぶん時間がたった。さて、女は櫛でつく。櫛の先はライオンの頭にとどいた。ずいぶん時間がたった。

さて、ライオンは穀物倉をふる。ずいぶん時間がたった。女はま

たしても、櫛でつく。ライオンはなやませた。

さて、ライオンは野原のまんなかで穀物倉を地面になげおろした。

さて、女がとびだしてきた。ライオンは女をひっぱっていき、たべてしまった。

さて、ライオンは娘のもとにもどっていった。ライオンが屋敷にかえると、屋敷にはだれもいなかった。娘はまえから父親のよめさんの性格がどういふものか知っていた。娘はにげてしまった。娘はどんだんはしっていった。ライオンは娘においつけなかった。

さて、娘は家にかえってきて、おちついたとき。

(一九八三年一月二日、語り手 ハディージャ、ガウンデレにて)

115 ドゥードゥとライオン

ある娘は継母においだされた。娘は野原にいった。娘は木にのぼって、そのうえにすわった。サルたちがやってきて、水をのんだ。ライオンがやってきて、娘に、「おまえさんはわたしが好きか、サルが好きか」といった。娘は、「わたしは、おまえさんが好き」といった。ライオンは、「おりてきなさい」といった。娘は木からおりて、ライオンについていった。

さて、ライオンは、いくと、娘を自分のよめさんにしてしまった。

さて、娘はそこにすんだ。ライオンはでかけていくと、動物をさがす。ライオンはかえってくるとき、歌をうたう。

「銀の腕輪をつけたわたしのドゥードゥよ、おまえはいるかい。」

わたしのドゥードゥよ、おまえはいるかい。

わたしの第一夫人よ、おまえはいるかい。

カータン・ネ・マンダよ（「塩でできた五徳」という意味）、

おまえはいるかい。

わたしのドゥードゥよ、おまえはいるかい。

わたしの第一夫人よ、おまえはいるかい」

さて、娘はそれにこたえる。

「立派な男よ、わたしはいる。

わたしの家の主人よ、わたしはいる。

わたしの夫よ、わたしはいる。

わたしのおおきな矢筒をもったものよ、わたしはいる。

わたしの夫よ、わたしはいる。

わたしの家の主人よ、わたしはいる」

ライオンは家につくと、獲物をドスンとおく。娘はその肉をどんだんたべていく。娘は王さまの子どもだ。娘は肉をどんだんたべてい

く。朝になると、男は野原にでかけていく。娘は川にいき、ヒョウタンでできた食器をあらう。娘は腰をおろす。娘はヒョウタンをあつめて、家にかえってくる。夕方、男はいそいで、かえってくる。男はうたう。

「わたしのドゥードゥよ、おまえはいるかい。

銀の腕輪をつけたわたしのドゥードゥよ、おまえはいるかい。

い。

わたしのドゥードゥよ、おまえはいるかい。

わたしの第一夫人よ、おまえはいるかい。

わたしのドゥードゥよ、おまえはいるかい。

銀の腕輪をつけたわたしのドゥードゥよ、おまえはいるかい。

い。

さて、娘はそれにこたえる。

「わたしの夫よ、わたしはいる。

わたしのおおきな矢筒をもったものよ、わたしはいる。

わたしの夫よ、わたしはいる。

わたしの家の主人よ、わたしはいる」

男は家につくと、獲物をドスンとおく。いつも、このような様子だったが、ある日、狩り人があつちこつちをうろついている。狩り人が木にのぼつてすわつてみると、娘が目にはいった。娘はヒョウタンをあらいおえて、それをかわかしておいた。狩り人は、「あれは

どういふことか。アッラーは王なり」といった。狩り人は娘の母親のところへいった。狩り人は、「どこそこにある川で、おまえさんたちの娘をみた。おまえさんたちがそこにいつて、娘がいなかったら、この首をあげる」といった。母親たちがいくと、ドゥードゥがいた。ドゥードゥの夫になつてゐるライオンがかえつてきた。ライオンは人びととたたかつた。

さて、人びとはずつとたたかつた。

さて、ライオンはすわつて、うたう。

「わたしのドゥードゥよ、なくな。

わたしのドゥードゥよ、なくな。

わたしの第一夫人よ、なくな」

ドゥードゥがいう。

「わたしの夫よ、わたしはないていない。

わたしの家の主人よ、わたしはないていない」

人びとはまた戦いをはじめた。人びとはながいあいだたたかつてゐる。人びとはつかれた。そこで、またライオンはすわつて、うたう。

「ドゥードゥよ、なくな。

わたしのドゥードゥよ、なくな。

銀の腕輪をつけたわたしのドゥードゥよ、なくな。

わたしのドゥードゥよ、なくな。

わたしの腕につけた銀の腕輪に免じて、なくな」

ドゥードゥがいう。

「わたしの夫よ、わたしはないていない。

わたしの家の主人よ、わたしはないていない」

そうしていると、人びとはライオンに、「いまいうけれども、おまえさんたちの村では、たたかっていると、礼拝をしないのか。いま、お日さんがどこにあるか、みてみなさい」といった。

さて、ライオンはお日さんを見あげた。人びとはライオンの首をきりおとした。

さて、人びとは娘に、「たちあがりなさい。いこう」といった。人びとは娘に、娘の夫の脚をきりとってやり、娘にもたせる。人びとは娘の夫の脚をきりとき、その脚といっしょにする。娘はよこよにねる。娘はすわるとき、その脚といっしょにする。娘はよこよになると、その脚といっしょにねる。娘の幼友たちはその脚をもちあげると、水底にすてた。

そこで、ドゥードゥは水のなかに身をなげこんでしまったとき。さて、お話はあちらにある。わたしは、こちらにいる。

(一九八〇年八月二五日、語り手 女性、レイ・プーバにて。嶋田にかたつたもの)

116 二人の娘

ある男に二人の娘ができた。一人は妹で、一人は姉さんだった。二人は髪の毛をゆつてもらい、毛をそってもらった。二人がかえつてくるとき、姉さんは、「わたしと妹のどちらが、よりきれいか」という。人びとは、「おまえさんはきれいだ。でも、おまえさんの妹はほんのすこしだけおまえさんよりきれいだ」といった。姉さんはあちらにいくと、「わたしと妹のどちらが、よりきれいか」という。人びとは、「おまえさんはきれいだ。でも、おまえさんの妹はほんのすこしだけおまえさんよりきれいだ」といった。そうしているうちに、二人は川にやってきた。二人が川にいくと、姉さんは妹に、「水をくみなさい」という。二人は半截ビョウタンをとった。妹がさきすすんでいくと、姉さんは、「もつとさきにいきなさい。もつとさきにいきなさい」という。妹は水におぼれてしまった。

さて、姉さんはたちあがり、家にかえっていった。姉さんは家にかえると、父親に、「妹は水におぼれてしまった」という。

さて、鳥がやってきて、水をみんなのんでしまった。そうして、娘の毛をつかみ、娘をひっぱりだした。水からだすと、娘をバオバ

ブの木につれていった。(鳥はクンバ・クンバという名前をもつ。)クンバ・クンバは娘をつれてくると、そこにおいておいた。鳥が娘をとると、娘はお腹にあつた水をはきだした。娘はどんどん水をはきだした。娘は正気をとりもどした。鳥は、「娘になりたいのか、それとも、よめさんになりたいのか」といった。娘は鳥に、「それでは、すきなようにしておくれ」といった。鳥は、「それでは、よめさんにする」といった。娘は、「よろしい」といった。

さて、娘はずっとそこにおり、そのうちに、バオバブの木のなかで男の子をうんだ。

さて、娘の父親に、ウシ飼いがいた。群に、サージエという雌ウシがいた。ウシ飼いはウシを野原につれていき、ウシに草をたべさせていった。雌ウシがないた。

さて、バオバブの木のなかにいる娘はいう。

「サージエよ、きいたかい。

家にかえつたら、ヤーヤの父親によろしくいっておくれ。

ジードの娘、姉さんにはなにもいわないで。姉さんはいへん悪い人。あの人はわたしをおばれさせたが、わたしは死ななかつた」

ウシ飼いとウシは家にかえつていった。ウシ飼いはその晩、娘のことをいおうとしなかつた。またしても、ウシ飼いはウシを野原につれていった。サージエは子をうんだあとで、野原にウシをつれてい

くと、ないた。それをきいて、娘はいう。

「サージエよ、きいたかい。

家にかえつたら、ヤーヤの父親によろしくいっておくれ。

ジードの娘、姉さんにはなにもいわないで。姉さんはいへん悪い人。あの人はわたしをおばれさせたが、わたしは死ななかつた」

ウシ飼いは家にかえつていった。ウシ飼いは、「親父さん、きょうはうそをつきます。気にいらなければ、それを真にうけなくてよろしい。きょう、わたしはあなたのお嬢さんの声をききました」という。娘の父親は、「おまえはうそをついている」という。ウシ飼いは、「ほんとうなのです。きょう、わたしはだれその声をききました。あなたのお嬢さんの声でした。きょう、サージエがなきました。それにこたえて、お嬢さんがいいました。

「サージエよ、きいたかい。

家にかえつたら、ヤーヤの父親によろしくいっておくれ。

ジードの娘、姉さんにはなにもいわないで。姉さんはいへん悪い人。あの人はわたしをおばれさせたが、わたしは死ななかつた」と。

きょう、わたしはそれをいいませんでした。きょう、わたしがウシを野原につれていくと、サージエがなきました。それにこたえて、お嬢さんがいいました。

「サージェよ、きいたかい。」

家にかえつたら、ヤーヤの父親によろしくいっておくれ。

ジードの娘、姉さんにはなにもいわないで。姉さんはいへん悪い人。あの人はわたしをおぼれさせたが、わたしは死ななかつた」と。

お嬢さんはバオバブの木のうえにいます」といった。娘の父親は、「よろしい、いこう」といった。ウシ飼いは、「わたしはここにいます。ウシを野原につれていくときに、いきましよう」といった。ウシ飼いはウシに草をたべさせ、ウシは満腹した。ウシは野原で草をたべている。ウシ飼いはウシをバオバブの木のそばまでおつていった。サージェがないた。娘はいった。

「サージェよ、きいたかい。」

家にかえつたら、ヤーヤの父親によろしくいっておくれ。

ジードの娘、姉さんにはなにもいわないで。姉さんはいへん悪い人。あの人はわたしをおぼれさせたが、わたしは死ななかつた」と。

娘の父親とウシ飼いは娘の声をきいたではないか。

さて、娘の父親とウシ飼いはたくさんの人をあつめた。人びとはバオバブの木をきつて、木をたおしてしまった。人びとは娘を木からつれだした。娘には、男の子ができていた。

さて、人びとは娘を家につれてかえつた。娘は家にかえるとき、

「わたしたちは髪の毛をあんでもらいにいつていた。さて、ねえさんは、『わたしと妹のどちらが、よりきれいか』という。人びとは、『おまえさんはきれいだ。でも、おまえさんの妹はほんのすこしだけおまえさんよりきれいだ』といった。姉さんはわたしをおぼれさせた。姉さんはわたしに、『さきにいつて、水をくみなさい』といった。とうとうわたしは、水におぼれてしまった。鳥はわたしをつれていつて、木の洞にいれた」という。

さて、鳥がいう。

「わたしは野原で一日をすごす。

わたしは野原で夜をすごす。

わたしがかえつてくると、

おまえは枝分かれしているバオバブの木のまんなかにいる。

ウシの群をもっている父親。

ウシの群をもっている母親。

おまえは枝分かれしているバオバブの木のまんなかにいる」

さて、娘がいう。

「ウシの群をもっている父親。

ウシの群をもっている母親。

おまえさんがかえつてくると、

わたしは枝分かれしているバオバブの木のまんなかにいる」

鳥がかえつてきていう。

「ウシの群をもっている父親。

ウシの群をもっている母親。

おまえは枝分かれしているバオバブの木のまんなかにいる」

返事がない。鳥はいう。

「ウシの群をもっている父親。

ウシの群をもっている母親。

おまえは枝分かれしているバオバブの木のまんなかにいる」

返事がない。鳥がかえってくる、バオバブの木がたおれていた。

鳥はずつとないでいたが、そこで死んでしまった。人びとは自分た

ちの娘をつれかえったとき。

おちてきたお話、ふつてきたお話で、お話のお礼をする。

(一九六四年九月、語り手 ウォダーベ・ホントルベ氏族のもの、

ガウンデレ地方のヤルンバンのちかくのババ村にて)

117 雨とそのよめさん

娘はたいへんきれいだつた。

さて、雨がふっている。雷がなると、雨は娘をつれさつてしまつ

た。雨は娘をつれさつた。雨は娘をつれていき、娘と結婚した。雨

は娘をつれていき、屋敷においておいた。雨はいくと、娘を天にお

いておいた。娘には弟がいた。弟は姉さんのことで、いやになるほ

どずつとないた。

ある日、弟は母親に、「ばくは姉さんについていく」といった。

弟が自分とおなじほどの年頃の子ともいいあらそうとき、子ども

たちは、「おまえの姉さんは雨にとられて、どこかにいつてしまつ

た。勇気があるなら、どうしておまえはここにいるというのか」と

いう。弟は、「よし」といった。

さて、弟は姉さんについていった。男の子はどんどんあるいてい

った。男の子がいくと、おおきな屋敷があつた。入り口の小屋はた

いへんおおきかつた。じつは、これは男の子の姉さんのむこさんの

屋敷の入り口の小屋だつた。入り口の小屋は、バラフォン(したに

ヒョウタンの共鳴器のついたシロホン)や太鼓でいっばいだつた。

男の子はそこについた。人びとは畑にでかけていた。男の子はそ

こについた。男の子はバラフォンをとつた。男の子の姉さんの名前

は、ダイイラという。男の子はバラフォンをたたいている。

「ダイイラよ、黒雲と結婚した女よ。

ダイイラよ、雨の親分の女よ。

ダイイラよ、母さんが雨によくといつた。

ダイイラよ、父さんが雨によくといつた。

ダイイラは、あともどりのできない嫁入りをした。

ダイイラよ、黒雲と結婚した女よ。

ダイイラよ、黒雲と結婚した女よ。

ダーイラよ、雨のおおきな女よ」

さて、姉さんは屋敷のなかで、パラフォンをきいた。姉さんは、「ああ、弟がやってきた。ああ、雨にたべられてしまう。ああ、雨にたべられてしまう」といった。姉さんがでてくると、弟がいた。姉さんは弟を屋敷のなかにつれていった。姉さんはいくと、弟を土ナベのなかにいれて蓋をした。姉さんのむこさんが家にかえってきた。むこさんが、「この小屋のなかでなにおうのか」といった。よめさんは、「たくわえてある肉がにおうのさ」という。むこさんが、「その肉をよこせ」といい、肉をうけとり、たべる。むこさんが、「ここでなにおうのか」といった。よめさんは、「あなたがくれた、たくわえてある肉がにおうのさ」という。むこさんが、「その肉をとって、よこせ」という。とうとう、よめさんはどういったらよいかわからないので、こまってしまった。

さて、よめさんは、「弟がやってきた。わたしは弟をここにかくしてある」といった。むこさんは、「おまえは、どうして弟がきたというのに、かくしておくのか。つれてこい。つれてこい。つれてこい」といった。よめさんはいくと、弟をつれてきた。むこさんはよめさんの弟をみて、「ようこそ。ようこそ。ようこそ」と弟をむかえた。雨とそのよめさんとよめさんの弟はずっとそこにいる。雨は自分の口を自分の義理の弟の口につける。弟の口は血だらけだ。むこさんはカタガユをとると、おかずをつけて、どんどんたべて

いく。そのつぎの日になり、三日たち、そのつぎの日、むこさんは畑にでかけるとき、ハンセン病者を入り口の小屋におらせ、屋敷の番をさせた。むこさんは、義理の弟がよめさんをつれてにげだすなら、ハンセン病者が太鼓をたたく。自分はそれをきいて、家にかえつてくるといった。姉さんはいくと、セサモイデスの葉（はねばねばする）などをとってきて、水とまぜて、入り口の小屋一面にこぼしておいた。

さて、弟は姉さんをつれると、どんだんあるいていく。ハンセン病者たちがおきあがって、太鼓をたたこうとすると、すべてこける。

さて、男の子はいってしまった。いつてしまった。おおきな川があった。二人はその川をわたった。その川の水は、湯になってわいている。湯になってわいている。弟は姉さんとこの川をわたった。二人は向こう岸にすわっている。とうとう、雨の親分が家にかえってきた。雨の親分はよめさんのあとをつけた。雨の親分たちは川についた。雨の親分が向こう岸をみた。雨の親分がみると、よめさんがいた。水にはいつていく方法はない。雨の親分は大声をあげてしかる。雨の親分の手下が川にはいると、足がなえた。雨の親分は大声をあげてしかる。

さて、弟は姉さんをつれて、道があるいていった。二人は道があるき、自分たちのところにかえっていった。二人がいくと、母親と

父親がいた。こうして、姉さんは家におちついた。ある男がその村からでてきて、姉さんと結婚した。雨の親分は我慢したとさ。

お話は、おしまい。

(一九八三年一月二六日、語り手 アスタ・ジョーダ、ガウンデレにて)

118 化け物の村のネーネ

お話、お話。

ある男の名前は化け物たちの村のネーネという。そのよめさんの名前はデイージャという。二人はいつしよにいる。

さて、ながいときがすぎさった。

さて、ある日、ネーネは、「わしはおまえに五日やる。そのあいだくるな」といった。ネーネの村はとおかつた。デイージャは、「よろしい」といった。デイージャはかえつてきて、三日いた。デイージャは我慢できなかった。

さて、デイージャは四日目にたちあがりいくと、ネーネがいなかった。

さて、デイージャはネーネの小屋のなかで、よこになり、かくれていた。ほんとうのこと、ネーネは化け物だった。ネーネは化け物になり、人びとをころし、その人びとの死体を小屋のまんなかにな

げおろし、その死体をどんだんたべていき、すっかりたべてしまった。ネーネは死体の残りをベッドのしたまでおしていった。自分のベッドのしたにおおきな穴があった。

さて、ネーネは人の骨をとると、穴のなかにいれた。湯をいれたナベが火にかかっている。

さて、ネーネは湯をもつてくると、穴のなかにいれた。残りをとると、それで、行水をした。

さて、デイージャは一部始終をみている。

さて、デイージャは小屋をでていき、ここから屋敷の入り口くらいはなれていた。

さて、ネーネは自分のベッドのうえまでかえつてきて、自分の竖琴をとり、よこになって、人の姿にもどろうとするが、化け物の毛が体にすこしのこっている。

さて、ネーネは竖琴をとると、デイージャの名前のはいった歌をうたっている。

さて、ネーネはパタパタと草履の音がするのをきいた。足音はちかづいてくる。とうとうやってくる、小屋にはいった。

さて、ネーネがうえをみると、そこにデイージャがたっている。ネーネはたちあがった。デイージャは、「わたしはおまえさんのところに来たのね」といった。デイージャははしった。化け物たちの村のネーネはデイージャのあとをはしっていく。二人ははしってい

く。ディージャはとびはね、こける。ネーネもとびはね、こける。ネーネの体には人の肉がはいっている。ネーネはこの体では、ディージャにおいつくことができない。ディージャは父親の家のうらまでやってくると、(屋敷をかこんである) 葦簀に頭からつつこみ、小屋の入り口にむかつていき、父親の自分の母親でないよめさんのうしろにたおれた。

さて、ディージャは一言もしゃべらなかつた。ネーネはディージャのうしろでたちどまり、舌をうち、きびすをかえすと、もどつていった。

さて、それから一週間たつた。

さて、ネーネはたちあがり、村のちかくまでやってきた。ネーネはディージャをよんだ。ほんとうのこと、ディージャはネーネにおつかれた目から、おしになつていた。ディージャはおきあがつて、ネーネのところに行った。ネーネはディージャに、「ディージャよ、おまえはわしの秘密をみんなみてしまった。でも、だれかの口からそのことをきいたら、わしはおまえをたべてしまつてやる。わしはおまえとおまえの一族をみんなたべてしまつてやる」といった。

さて、ディージャはたちあがり、父親のところにかえつていった。ディージャはネーネに、「わたしたちはここでわかれたら二度とあわない」といった。ディージャはたちあがり、父親のところにか

えつていった。ネーネは自分のところにかえつていった。それから何年もたち、ネーネは死んでしまった。

さて、ネーネが死ぬとき、ディージャは口をひらき、ネーネの秘密についてはなした。それで、その話はいままで、世の中にひろまつた。

さて、こうして、ディージャはその話をすべてはなしたとき。

お話はおしまい。お話はみじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二〇日、語り手 ディージャ・プーバ、ガウン
デレにて)

119 弓を射る二人の男の子とライオン

さて、ちいさなお話、ちいさなお話。

二人の男の子がいた。二人はたちあがり、相談をした。二人は友だちだつた。二人はでかけていく。二人は矢を射る練習をするといふ。二人が矢を射る練習をしようとしているとき、ライオンが木のそばで、子どもをうんだ。二人が木のそばにつくと、一人は、「ライオンの子どもをうつ」といった。もう一人は、「うつな」といった。一人は、「うつ」といった。もう一人は、「うつな」といった。二人はいいあらそつた。一人はライオンの子どもをうち、ころしてしまつた。

さて、矢を射なかった男の子は、「きみはライオンの子どもをころしてしまった。ほくは家にかえる」という。もう一人も、「ほくも、家にかえる」という。二人はつれそつて、家にかえつていった。

さて、ライオンがやってくると、自分の子どもがころされていった。ライオンは、「わたしは、ころした人をさがしてやる。アツラーがそれをゆるされるなら、わたしはその人をさがしてやる」といった。ライオンは女の婆になった。

さて、女は着飾った。女はあるきながら、いう。

「だれが、イッリをころしたのか。」

わたしはイッリをころしたものに、お札をやる。

お札はラクダ」

ある若者がいう。

「わたしはイッリをころした。」

おまえさんはイッリをころしたお札をくれる。

お札は、ラクダ」

女はいう。

「若者よ、おまえさんはイッリをどこで見つけたのか」

若者がいう。

「わたしはイッリを野原で見つけた」

女はいう。

「若者よ、おまえさんはほんとうのことをいった。」

お札は、ラクダ」

女はさきにすすんでいく。女はべつの村にいくと、たちどまつていう。

「だれが、イッリをころしたのか。」

わたしはイッリをころしたものに、お札をやる。

お札はラクダ」

ある若者がいう。

「わたしはイッリをころした。」

おまえさんはイッリをころしたお札をくれる。

お札は、ラクダ」

女はいう。

「若者よ、おまえさんはイッリをどこで見つけたのか」

若者がいう。

「わたしはイッリを野原で見つけた」

女はいう。

「若者よ、おまえさんはほんとうのことをいった。」

お札は、ラクダ」

女はさきにすすんでいく。女はべつの村にいくと、たちどまつていう。

「だれが、イッリをころしたのか。」

わたしはイッリをころしたものに、お礼をやる。

お礼はラクダ」

ある若者がいう。

「わたしはイッリをころした。

おまえさんはイッリをころしたお礼をくれる。

お礼は、ラクダ」

女はいう。

「若者よ、おまえさんはイッリをどこで見つけたのか」

若者がいう。

「わたしはイッリを野原で見つけた」

女はいう。

「若者よ、おまえさんはほんとうのことをいった。

お礼は、ラクダ」

とうとう、女は二人の男の子のところについた。

さて、女はいう。

「だが、イッリをころしたのか。

わたしはイッリをころしたものに、お礼をやる。

お礼はラクダ」

ライオンの子どもをころした男の子がいう。

「わたしはイッリをころした。

おまえさんはイッリをころしたお礼をくれる。

お礼は、ラクダ」

女はいう。

「若者よ、おまえさんはイッリをどこで見つけたのか」

若者がいう。

「わたしはイッリを木のしたで見つけた」

女はいう。

「若者よ、おまえさんはほんとうのことをいった。

お礼は、ラクダ」

さて、ライオンの子どもをころした男の子の家族は男の子を屋敷からおおいだし、「でていき、礼をうけとつておいで。おまえの幼友だちがころすなといったけれども、おまえがころしたのだから。おまえは礼がもらえる。おまえの友だちはなにももらえない。でていきなさい」という。男の子の家族は男の子をおい出した。男の子ができた。

さて、女は男の子をみつけると、ライオンの姿にもどり、男の子を足でふみつけ、仇討ちをしたとき。

お話のみじかく、わたしの命はながい。お話はおしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。ひよつとしたら、ウサギはやせて、わたしはふとる。草の茎はうずまる。わたしはそとにでる。

(一九八三年一月二五日、語り手 ハッジャ・デッポ・マンガ、
ガウンデレにて)

120 男と化け物たち

ちいさなお話、ちいさなお話。ジャンマ・タボーイエル。お話をもう一度きこうとする人の頭のうえに、穴のあいた半截ヒョウタン。

ある男が女をめとった。男が女をめとったとき、男はその女の村のことをなにもしらなかった。ほんとうのこと、女は化け物になるのだった。女の家族はみんな化け物になるのだった。いつも、女の家族は化け物になる。ある日、女は自分のむこさんに、「わたしたちはわたしの家族のところに行かなければなりません」といった。男の名前はムーサという。

さて、ムーサは女に、「よろしい、それでは父親たちにいってよいかたずねてみる」という。

さて、男はいくと、父親たちにその話をした。父親はムーサに、「息子よ、おまえのよめさんがついてこいというからには、わたしはいくなどとはいわない。でも、ここにお呪いがある。なにかがおこったら、おまえは、『ウシの糞。アカ・ルツプ・エ・ルツプ』といい、ウシの糞のしたにはいり、そこにいなさい。化け物たちはおまえをつかまえないだろう。おまえがかえってくるまで、化け物はおまえにはなにもできないだろう」という。男と女は女の村にいった。二人はでかけていき、そこでとまった。そのつぎの日、女の

村の人たちは化け物になった。男は家にかえるといった。村の人たちは化け物になり、男についていった。

さて、男はどんどんあるいていく。村人たちは男についていった。男はあるいていく。村人たちは男についていった。村人たちが男をつけていると、男は村人たちがとおくからやってきて、埃をたてているのを見た。ほんとうのこと、男はにげていくとき、ズボンと短刀をもつてくるのをわすれていた。男は上着だけをきて、はしっていく。

さて、女は、「わたしはあなたをたべない。ムーサよ。わたしはあなたをたべない。ムーサよ。ここにあなたの腕につける短刀がある。ムーサよ。ここにあなたのズボンがある」という。

さて、村人たちがちかづいてきて、男をつかまえた。男は、「ウシの糞。アカ・ルツプ・エ・ルツプ」といった。村人たちがやってきて、男をさがしているが、男がどこにいるかわからなかった。村人たちはかえつていきそうだった。村人たちはかくれた。

さて、男はでてきて、どんどんはしっていく。

さて、村人たちはまたしても、もどつてきて、男のあとをつけていく。村人たちは歌をうたう。村人たちは男のあとをつけながら、歌をうたう。

さて、男は自分の村のちかくについた。

さて、男は切り株に姿をかえた。村人たちはやってくると、切

り株をほりかえしている。ほんとうのこと、村人たちは男が男の村にずっとまえにかえていったのをしらなかつた。男は自分の父親に、「ほんとうのこと、はくの結婚したあの女は化け物だった」といった。父親は男に、「あいつは化け物だったのか。よろしい。きなさい」という。父親は葉草をとりだし、男に、「わしらも、いつて、あいつらをころそう」といった。男と男の父親たちはどんどんあるいていく。男と男の父親が化け物の村にちかづく、男の父親は、「これが化け物たちの村か」といった。男は、「そう」といった。男の父親は、「いつて、あの人たちにおまえのよめさんをつれにきたといおう。あの人たちがハイエナの姿になって、わしらをくいにくると、わしらもライオンの姿になろう。あいつらをみんなころしてしまおう」という。

さて、男は、「よし」といった。男と男の父親は女の村につき、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をし、「わたしのよめさんはいるか。わたしはきょう、わたしのよめさんをつれにきた」という。村の人は、「おまえさんのよめさんは、川にいった。かえってくる」という。女の村の人たちは、男がやってきたことをしり、村にかえってきた。

さて、女の村の人たちはハイエナにばけて、男と男の父親をとりかこんだ。女の村の人たちが二人をたべてしまおうとする。二人はライオンの姿になった。ハイエナたちがやってくると、二人はハ

イエナたちをべちゃんこにしていく。ハイエナたちがやってくる、二人はハイエナたちをべちゃんこにしていく。ハイエナたちがやってくると、二人はハイエナたちをべちゃんこにしていったとさ。

お話は、おしまい。ウサギの蒸し焼きができた。

(一九六九—七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマース、マルアにて)

121 化け物と大男

わかるな。ある男がいた。この男はカーエレ村にいた。女は娼婦でここくらのところにいた。女は、だれもしらなかつたが、化け物だった。女は小屋のまんなかにおおきな穴をほった。

さて、女は、夜、ハイエナになり、でかけていき、人をころし、かえってくると、その死体をその穴のなかにいれる。女は人をたべると、その残りを穴のなかにいれる。女はその穴に蓋をする。そのうちに、女は男とであった。男は大男で、遊び人だったが、女に、「おまえがすきだ」という。女は、「それでは、わたしの小屋にいくか」という。二人は小屋にいき、一日中、話をする。そこで、女は男に、「おまえさんはどこにいるのか」という。男は女に、「わたしはカーエレ村にいる」といった。さっそく、女は、「おまえさん

は日暮れどきどうしてやってくるのか」という。男は、「くるから」といった。

さて、女は男に、「おまえさんとわたしのあいだだけの話だけれども、おねがい、真夜中にはこないように」という。男は女に、「よろしい。問題はな」といった。

さて、男はカーエレ村にかえっていった。男は食事をすまずと、女のところへやってきた。二人はねた。あくる朝、男は家にかえっていった。そのつぎの日、男はまだ日のあるうちにやってきた。しばらくすると、男は女に、「家にかえる」といった。女は男に、「日暮れどきにくるか」という。男は、「うん」という。女は、「おねがい。夜おそくこないように」という。男は、「よろしい。問題はな」といった。

さて、男はかえっていこうとする。女は、「いきなさい」といった。男は、「あの女はいつも、夜にくるなという。夜にくるなという。どうしてなのだろう。きょうは、真夜中についてやる」という。

さて、真夜中になった。男はやってきた。男は術をつかった。男は道のあるいてきた。男がくると、女はいなかった。だれにもわからなかったのだが、ほんとうのこと、女は化け物の姿になり、たべものをさがしにいつていた。男はやってくると、女の小屋をあけて、よこになった。男はずっとよこになっている。そのうちに、男

は、「ハイエナだ、ハイエナだ、ハイエナだ。いそげ。みんなのもの。いそげ」と人びとがさげぶのをきいた。女がかえってきた。ほんとうのこと、女は人をころし、その死体をひっぱってかえってくる、小屋のなかにいれた。女はその肉をたべたから、ベッドには注意しなかった。女はベッドをみなかった。ほんとうのこと、そのベッドのうえには、愛人の男がねていた。女は小屋のまんなかにあるおおきなカメの蓋をあけた。女はそのなかから、オノなどをひっぱりだした。女は男がいるのには気づかなかった。女は小屋の戸をしめた。女は首をきり、穴のなかになげこんだ。女は死体をすっぱりばらしてしまった。女はそれをたべた。

さて、女がもどってきて、死体をばらして、たべてしまい、小屋からそとにでようとしたとき、男は女の足をつかんだ。ハイエナの足をしっかりとつかんだ。

さて、男は短刀をぬき、女に、「残りをだして、くってしまわな」と、おまえをころしてしまおう」といった。女は穴から残りをだすと、たべてしまった。女はいくと人の姿にもどった。

さて、女がやってくると、若者(男のこと)がいた。若者は女に、「わたしは家にかえる」という。男はおきあがると、道のあるいていった。

さて、女は、「なんだって、わたしがあの若者をほっておき、若者がカーエレ村にかえって、いつて、みんなにわたしが人をころし

にいき、もどつてきて、その死体をたべるといふだろう。そうすれば、みんなはわたしをほつてはおかないだろう。ここからおいだすだろう」といふた。そこで、女はまえとおなじように、ハイエナの姿にもどり、おきあがり、どんどんはしつていく。女は男においついた。男はギターをもつて、あるきつづける。女は男の顔に埃をかけた。男は女にはなしかけなかった。男は女に、「なんということか。だれそれよ、おまえさんとわたしはこういう仲なのに、わたしをたべようというのか」といふた。女はもとにもどつていき、家にいた。女はまたしても、「あの人は、あす、わたしをほつておかないだろう。あの人はみんなにいう」とおもつた。女ははしつた。女は男のところへやつてきて、男をもちあげ、男をたおし、男にかみつこうとした。男は女に、「ここに短刀がある。わかるな、ここに短刀がある」といふた。女はまたしても、男が自分の愛人なのに、自分がどうしてたべらるだろうかとかんがえた。女はたちあがり、もどつていふた。

さて、男は木にのぼつて、すわり、「もう、あいつのことがわかつていふ。もどつてきたら、わたしをほつてはおかない」といふた。女はまたしても家にいふた。女は男のことを後悔している。女はまたしてもおきあがつた。女ははしつて、男がいたところまでやつてきて、「アッラーよ、わたしはあの人の臭いをかいでいるが、あの人がどこにいるかわからない」といふた。女はその場所をとお

りすぎ、まえのほうにはしつていふたが、男の姿はみえなかつた。女はまたしても木のしたまでやつてくると、そこでたちどまつた。そのうちに、夜があけた。女は人の姿にもどると、家にかえつていふた。そのつぎの日、女は男のところへいふた。二人はねた。女は男に、「おねがい。わたしの村までついでておくれ」といふ。男は、「よろしい」といふ。ほんとうのこと、女の村の人たちはみんな化け物だつた。

さて、夜があけると、二人はでかけていこうとする。男は村の人たちに別れをいふた。村の人たちは男にいろいろな薬（この薬をつかつて、変身する）をやつた。二人はたちあがり、あるいていく。男は、「ここはどこそこではないか。ここはどこそこではないか。ここはどこそこではないか」といふ。二人は野原のまんなかにいふた。女は、「いまから、この男をくつてやる」といふた。女は化け物の姿になつた。女が化け物の姿になると、男はライオンの姿になり、女についていふた。ライオンはハイエナのあとをあるいていふた。ハイエナがうしろをみて、ライオンにたべられないようにいふた。ライオンは、「いこう。おまえさんはたちどまりたいのか」といふ。そのうちに、村にちかづき、二人は人の姿にもどつた。二人はあるいていく。女は自分の村についた。村人たちは女をむかえた。村人たちが女にくれないものはなかつた。村人たちは男に男がねる小屋をやつた。（男はそこで、女とねる。）

さて、女はいくと、村人たちみんなと、遊び人の男をたべにくる相談をした。真夜中、村人たちは遊び人の男をたべにやってきた。遊び人の男はトカゲに姿をかえ、女の頭の毛のなかにはいった。村人たちがやってきて、男をつれていこうとする。そこには女しかない。そのうちに、夜があげた。

さて、遊び人は、「家にかえる」といった。村人たちはいくと、女と男をたべる準備をしにいった。

さて、男がかえっていくとき、村人たちは動物の姿になって、男のあとをあるいていく。遊び人の男は、どんどん家にかえって行く。女は男に、「わたしはおまえさんについておく。わたしは家族のものに、おまえさんをたべないようにと手をつくした。でも、道中、気をつけておくれ。家族のものはおまえさんのあとをつけていくだろう」といった。男は女をそこにのこした。男はたちあがり、どんどん家にかえって行く。

さて、男はとおくから埃がやってくるのをみた。じいさん、ばあさん、子どもたちもみんな化け物の姿をして、男についてくる。男がふりかえると、化け物たちがもうすこしで、やってくるのがわかる。

さて、男はいくと、ころがつて、ライオンの姿になった。男はもどつてくると、村人たちを、まるで雌ヤギをおうように、おいはらった。男は村人をつかまえると、ボキッとその骨をおる。村人を

つかまえると、ボキッとその骨をおる。村人をつかまえると、ボキッとその骨をおる。のこるは、化け物の女だけになった。男はこの化け物をひっぱつて、家につれてかえつてきた。男はかえつてくる時、この女と結婚した。人びとは男に、「おまえさんはそのような女をどのようにして手にいれたのか」とたずねた。男はその話をした。男はその話をしたとき。

お話は、おしまい。ウサギの蒸し焼きができた。

(一九六九—七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマヌ、マルアにて)

122 かしこい子どもと人をたべるおばあさん

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある男の子が旅にいくと、老女がいた。男の子は老女のところにとまった。夜になると、老女は客に食べ物をつくつてやった。男の子はそれをたべ、満腹した。夜がふけると、老女は男の子に、「客よ、おまえさん、きょうはどこでねるか」とたずねる。男の子は、「わたしはモロコシの荒い粉のあるところのほかどこでねるのか」といった。老女は男の子に、「よろしい」とこたえた。老女はいつてしまった。男の子はいくと、モロコシのはいつている半截ヒョウタンのなかによこになった。

さて、老女は火をおこし、やってくるると、モロコシの荒い粉に火をつけた。老女は自分のモロコシの荒い粉をすっかりもやしてしまった。夜があけて、朝になった。老女は男の子に、「なんだって。息子よ、おまえさんはきょう、どこでねるのか」という。男の子は、「おばあさん、着物のはいっている半截ヒョウタンのなかでねる」といった。老女は男の子に、「よろしい、息子よ」といった。男の子はいくと、落花生のはいった半截ヒョウタンのなかでねた。老女は火をとり、着物のはいっているヒョウタンに火をつけた。着物はみんなもえてしまったが、男の子はやけなかつた。夜があけて、朝になった。老女は男の子に、「孫よ、おまえさんはきょう、どこでねるのか」とたずねる。男の子は、「きょうは、おばあさんのモロコシのなかでねる」といった。男の子はモロコシのところをとおりすぎると、トウジンビエのはいっている半截ヒョウタンのなかでねた。老女はやつてくると火をとり、モロコシに火をつけた。モロコシみんなに火がついた。老女は男の子に、「なんだって。孫よ、あすは、どこにねるのか」という。男の子は老女に、「おばあさん、わたしは豆のはいったヒョウタンにねる」という。男の子は豆のところをとおりすぎると、雨期のモロコシのはいっている半截ヒョウタンのなかでねた。老女はやつてくると火をとり、豆に火をつけた。豆はすっかりやけてしまった。夜があけて、朝になった。老女は男の子に、「なんだって。孫よ、きょう、おまえさんは

どこでねるのか」という。男の子は、「おばあさん、きょうは、小屋のうえでねる」といった。ほんとうのこと、男の子はいくと、小屋のうしろでねた。

さて、老女は火をとると、小屋のなかから火をつけた。

さて、火はたちのぼった。老女はとびはね、小屋からでた。老女は男の子が小屋のうえにいるものとおもっている。すなわち、男の子がやけると、たべられるというわけだ。男の子は小屋のうらにいたが、いくと、かがんだ。老女は自分のものをみんなもやしてしまった。男の子はこんな目をして、老女をみて、わらっている。老女は、「なんだって、息子よ、きょうは、どこにねるのか」といった。男の子は、「おばあさん、そこにある葦簀でできた小屋でねる」といった。男の子はいった。老女は男の子についていった。老女は男の子に、「きょう、おまえさんはどこでねるのか」といった。男の子は、「さあね、おばあさん、きょうは、種のはいった籠のなかでねるとしようか」といった。男の子は種のはいった籠のところをとおりすぎて、コイモのはいった籠のなかでねた。コイモのはいった籠のなかでねた。

さて、老女は火をとると、自分がまこうとしてい種に火をつけた。種はすっかりやけてしまった。夜があけて、朝になると、老女は男の子に、「孫よ、きょうは、どこでねるのか」とたずねた。男の子は、「おばあさん、きょうは、わたしは雨期のモロコシの種の

ほかどこでねるのか」といった。男の子はいくと、種にする落花生のなかでねた。

さて、老女は火をとると、雨期のモロコシの種に火をつけた。雨期のモロコシの種はすっかりやけてしまった。ほんのすこしものこらなかつた。老女は、「孫よ、きょうは、どこにねるのか」という。男の子は老女に、「いやいや、おばあさん、その石臼でひいた粉をいれる半截ヒヨウタンのなかのほかどこでもねるつもりはない」という。男の子は石臼をとおりすぎて、小屋のまんなかでねた。老女は火をとり、いって、半截ヒヨウタンに火をつけた。半截ヒヨウタンはすっかりやけてしまった。老女は男の子に、「孫よ、きょう、どこでねるのか」とたずねた。男の子は、「おばあさん、きょうは、炉のほかのどこでもねるつもりもない」といった。(男の子はどこかほかのところでねる。)

さて、老女は火をとり、炉でもやした。火がついた。なにもでてこなかつた。なんの音もきこえなかつた。

さて、老女は男の子に、「孫よ、きょう、どこでねるのか」とたずねた。男の子は、「おばあさん、なんだつて。きょうは、おまえさんたちの葦簀のうえでねる」といった。老女は、「よろしい」といった。老女は火をとり、自分の葦簀に火をつけた。老女の葦簀はすっかりもえてしまった。男の子はそこをとおりすぎて、自分の葦簀の端のほうでねていた。男の子はいくと、よこになり、老女がす

ることをみている。男の子はぐるっとまわると、老女をやいてしまった。老女のものはすべてやけてしまった。男の子は、「ここでねる」と老女にうそをつき、つぎの日、べつのところへねる。「ここでねる」と老女にうそをつく。つぎの日、べつのところへねる。老女は自分のものをすっかりやいてしまった。自分の小屋さえもやしてしまったとき。

わたしが話をしたのではない。切り株が話をしたのだ。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードウ・サーリ・サイドウ・ムーサ、レイ・プーバにて。この話は、ドウ・マリーヨ町で、ラカ族のアスタ・バナからきいた。イーサはレイ・プーバ地方のターマ族である)

123 ハンセン病者の村からにげてきた男の子(1)

すなわち、この話は王子の話だ。王子は、つよいウマをもっていた。王子はウマにのつたことがなかつた。

さて、王さまは王子に、ウマにのつて、はしらせ、手綱をひいて、ウマをとめるようにといった。ウマにのつて、はしらせ、手綱をひいて、とめるようにといった。王子はウマにのつて、はしらせ、そのへんをまわつて、王さまに挨拶することになった。ウマにのつて、はしらせ、そのへんをまわつて、王さまに挨拶することに

なった。すこしあとで、王子はウマをはしらせた。

さて、轡がとれてしまった。

さて、ウマは野原にむかつていった。王子はどんだんはしっていった。王子は野原についた。

さて、ウマは河床をとびこえた。

さて、川をわたると、王子はハンセン病にかかった人たちの村に
はいった。

さて、王子はそこについた。村人は王子をつかまえて、小屋にと
じこめた。しっているとおもうが、ハンセン病にかかった人たちは
人をたべる。村人は王子をつかまえて、小屋にとじこめた。村人は
王子をたべかけた。村人は王子をたべようとした。

さて、王子は村人たちをたちどまらせた。村人たちは王子に、
「どうしたのか」といった。あるものは薪をとりに行く。あるもの
は、すわって、王子の番をしている。

さて、王子はすわって、歌をうたう。

「ベネ・クイ・ベネーネ・クイ・クイ、

ベネーネ・クイ」

王子はこのようにうたう。

さて、ハンセン病にかかった人は自分の太鼓をどんだんたたき、
あそんでいる。

さて、王子はすわって、歌をうたっている。ハンセン病にかかっ

た人が王子に、「どうしたのか」といった。王子は、「歌をうたおう
か」という。ハンセン病にかかった人が、「おまえさんはおどるか」
という。王子のウマは話をきいている。ウマは人の話がわかつてい
る。

さて、王子は自分のウマに小声ではなした。王子はムブム族のこ
とばで、こいといった。王子は自分のウマにくるようによった。

さて、王子のウマがやってきて、王子の小屋のそばにたつた。王
子はそのウマに自分をだすよにといった。ウマは王子をそとに
だした。王子は歌をうたっている。

「ベネ・クイ・ベネーネ・クイ、

ベネ・クイ。ター・ミ・タツパ。

ベネ・クイ。ター・ミ・タツパ」

ハンセン病にかかった人はふくものをとりだした。人がふく、なが
いもの、王さまたちのものだ。そうだ、ラツパだ。王子は歌をうた
いはじめた。

「ベネ・クイ。ター・ミ・タツパ」

村人はラツパを吹いている。ラツパを吹いている。王子はうたう。

「ベネ・クイ・ベネーネ・クイ・クイ、

ベネ・クイ。ター・ミ・タツパ。

ベネ・クイ。ター・ミ・タツパ」

すこしすると、王子はたちあがり、ウマをとばす。ハンセン病に

かかった人たちは野原で王子をさがしている。ハンセン病にかかった人たちはそこにやってくる人をみんなころしていく。

さて、王子は自分のウマにのった。自分のウマにのった。王子は屋敷に矢をもっていた。王子が矢をよぶと、矢は自分で王子のところにやってくる。矢はおきあがり、王子のところにやってくる。矢が王子のところにやってきたとき、村人たちはいっしょにいた。王子は矢といっしょにいる。矢を一本射ると、矢は百人をつきとおす。矢はもと矢をいたところにもどってくる。矢が一本と弓が一本あるだけだ。王子はそれで敵を射る。王子はハンセン病にかかった人たちとたたかった。村人たちとたたかった。王子は村人たちにかつて、家にかえってきた。もとはといえ、奴隷たちが王子が王さまになれないように、相談をして、王子をころそうとして、轡をはずしておいたのだった。王さまが死んだとき、王子を王さまにさせないためだった。そのころ、王さまは死にかけていた。王さまが死んでしまうと、べつの人を王さまにしようとしていた。王子は邪魔をしていた人たちをころしてしまった。王子はかえってきて、王さまになつたとさ。

さて、この話はおしまい。これはみじかい話だ。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は一九八二年二月に、ガウンデレの王宮の女奴隷からきいたという。)

124 ハンセン病者の村からにげた男の子(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある男がいた。男はいくと、雄ウマをかつた。男はそのウマを自分の屋敷につれてかえってきた。男がいつて、ウマをつれてかえつてくると、男に男の子がうまれた。男の子はやつてくると、ウマにつて、どんだんはしる。ウマはいうことをきかなかつた。轡がきれてしまった。

さて、轡がきれると、ウマはどんだんすすんでいき、ハンセン病患者たちのすんでいる村にいった。ハンセン病患者たちは男の子をむかえて、とまるるところをしつらえた。あるものは、薪をさがしていくと、もつてかえつてくる。男の子がくると、村人たちにたべられてしまうといった。

さて、男の子は歌をうたう。

「ベネ・クイ・ベネーネ・クイクイ。

ベネ・クイ、両手でうけとらないように。

ベネ・クイ、両手でうけとらないように」

村人たちは、「男の子をほっておくな」といった。

さて、男の子のウマはへビをはきだし、トカゲをはきだした。

さて、男の子はトカゲの手足をきりとり、村人たちにわたした。村人たちはべつのもをきるようにといった。男の子はトカゲをみ

んな村人にわたした。

さて、村人たちは薪をとりに行った。男の子はもう一度歌をうたってほしいなら、自分をいれられているところから、だすようにと行った。男の子は歌をうたう。

「ベネ・クイ・ベネーネ・クイクイ。」

ベネ・クイ、両手でうけとらないように。

ベネ・クイ、両手でうけとらないように。」

男の子は村人たちにすわって、歌をうたうようにと行った。男の子はウマにのって、そちらにいくとき、「ぼくはもどってくる」といい、やってくる、ウマの手綱をひく。男の子は道にやってくる。男の子が道につき、道をすすんでいくと、ハンセン病者の村人がウマをつかもうとする。すると、(ウマの尻っぼについている)刃物が村人の手をきる。村人がウマをつかもうとする。すると、刃物が村人の手をきる。村人がウマをつかもうとする。すると、刃物が村人の手をきる。村人がウマをつかもうとする。すると、刃物が村人の手をきる。とうとう、男の子は、自分たちの村についたとき。

わたしの話はおしまい。

(一九七六年八月一六日、語り手 アーマドウ・ルファイー、ガウンデレにて)

125 兄弟二人と人をくう人たち

二人の兄弟がいた。一人は兄さんで、もう一人は弟だった。二人はおなじ村にすんだ。二人はおなじ村にいた。二人はそこにいた。弟は、「ぼくらのいる村には、なにもいいものがない。人をくう人たちの村にいき、博打をうって、お金を手にいれよう」といった。

さて、弟はウマをつれた。男の子はほとんどはしつていった。いくと、ナスビが、「わたしをくうな。わたしをくうな」という。べつのナスビが、「わたしをたべろ。わたしをたべろ」といった。男の子はナスビをつんで、たべた。男の子はニワトリの卵をなげた。一つは川になげた。川の水がすっかりなくなつた。男の子は川をわたつた。男の子はほとんどはしつていった。いくと、人をたべる人たちの村があつた。この人たちはどうしようもないくらいたくさんの人をたべる。

さて、男の子はいくと、どんどん博打をうった。

さて、男の子のウマの尻尾には、カミソリや、ナイフがぶらさがっている。ナイフは人の手をきる。

さて、男の子はどんどん博打をうった。この村の人たちが、「おかづがきた。おかづがきた。おかづがきた。おかづがきた。おかづがきた。おかづがきた」といった。人びとは水を(ナベにいれて、そのナベを竈に)おき、火のうえに薪をつみかさねた。男の子をた

べようとしているのだ。

さて、男の子はどんどん博打をうった。男の子はもうそれでよいとおもった。

さて、男の子はたくさんのお金をもうけた。男の子はやつてくると、ウマにのった。馬にのって、はしっていった。村の人たちが男の子のあとをはしっていき、ウマの尾っぽをつかむと、手はみんなきれる。ウマの尾っぽをつかむと、手がきれる。男の子は川にいった。男の子はニワトリの卵をなげて、川をわたった。もう一つをしるになげた。川の水はにえたった。村の人たちは川にはいると死んでしまった。五人か、六人が死んだ。

さて、男の子は家にいった。

さて、男の子は家につき、ねた。男の子はいくと、お金をとり、父親にやった。兄さんが、「おまえはちいさいのに、いつて、このお金を手にいれた。ぼくがいけないというのか。ぼくはいく」といった。弟は、「兄さん、あの場所はいける場所ではない。あそこの人たちは人をたべる。兄さんのウマの尻尾にはナイフがついていない。ぼくのウマの尻尾にはナイフがついている。兄さんがいくと、あの人たちにつかまって、わけもなくころされてしまう。ここにいなさい」といった。

さて、兄さんは、「うそをつくな。ぼくはいつてみる」といった。兄さんはどんどんすすんでいった。いくと、ナスビがあった。ナス

ビは、「わたしをたべる。わたしをたべる」といった。兄さんはナスビをたべなかった。「わたしをくうな。わたしをくうな」といった。ナスビをつんで、たべた。兄さんはどんどん野原をすすんでいった。兄さんはいくと、ニワトリの卵を川になげた。川の水がすつかりなくなった。兄さんは、はしっていき、その村にいった。

さて、村の人たちは、「肉がきた。肉がきた。肉がきた。肉がきた。肉がきた。肉がきた。肉がきた。肉がきた」といった。兄さんはじゅうぶんなお金を手にいれた。兄さんはたちあがり、ウマにのった。兄さんはもどってくる。とうとう、村の人たちがおきあがり、兄さんをつかまえて、兄さんをうえからおさえた。兄さんのウマの尾っぽにはなにもついていなかった。村の人たちはいくと、兄さんをつかまえておさえた。村人は、「お金をだせ」といった。兄さんはお金をだした。村の人たちが、「おまえさんのきている服をぬげ」といった。兄さんは服をぬいだ。村の人たちは、「寛衣をぬげ」といった。兄さんは寛衣をぬいだ。村の人たちは、「パンツをぬげ」といった。兄さんはパンツをぬいだ。村の人たちは、「帽子をぬげ」といった。兄さんはなにもかもぬいだ。村の人たちは、「おまえさんのナイフをよこせ」といった。村の人たちは、「おまえさんの体につけているものをみんなよこせ」という。兄さんは体につけているものをすべてとり、裸でウマにのった。

さて、兄さんはどうしようもなかったの、口に手をやり、大声をあげた。兄さんはずっと大声をあげている。村の人たちはウマをどんどんナイフできつていく。

さて、兄さんは大声をあげた。弟がそれをきいた。弟は川に水浴びにきていて、兄さんの声をきいた。弟は自分のウマをつれると、はしってやってきた。弟がいそいでいくと、兄さんは裸ですわつていた。

さて、弟は兄さんをウマのうえにひきあげ、ウマにのせた。

さて、弟はどんどんはしつてきた。弟はやってくると、ニワトリの卵を川になげた。川の水がすっかりなくなつた。弟は川をわたつた。弟は水をにえさせ、村の人たちをころしてしまふことになる卵をなげた。(村の人たちは川にはいつて、死ぬ。)

さて、弟ははしつて家についた。弟は家にかえると、兄さんに、「だから、ぼくは兄さんにあいつたのだ。兄さんはぼくにさからつた。兄さんはもうすこしでころされるところだつた」といつた。

さて、兄さんは、「ああ、弟よ、それがわかつており、それをきいていたら、いかなかったのに。もうすこしで、ころされるところだつた。ぼくはわけもなく、村の人たちにすっかりとられてしまった。みてみる、ぼくは裸になつてしまった。おまえにもらつたもので、じゅうぶんだ。欲につられていつたのだ。ほかの理由はない」といつたとき。

お話は、おしまい。

(一九八一年二月一六日、語り手 オマル・セイニ・トービ・ムーサ・ラベヤ、レイ・ブーバにて。オマルの父親はモノ族、母親はムブム族。オマルは、フルフルア語よりムブム語がよくわかる。オマルはレイ・ブーバ地方のトゥボロで二三歳までいた。この話は、王さまの屋敷の門番であるドウル族のグルド・ハマ・ヤージからきいたという)

126 野原の怪物と娘

きれいな娘がいた。ある男がこの娘と結婚したかった。娘はこの男がまったく好きではなかつた。娘はこの男がきらいだったので、べつの男と結婚したいといつた。べつの男はこの娘がそんなに好きではなかつた。

さて、娘にきらわれた男は川にいき、娘と野原の動物をあわせた。娘にきらわれた男たちはでかけていき、そこで娘をハイエナとあわせた。

さて、ハイエナは娘をたべるといつた。娘はたちあがり、どんどんにげていく。娘はやってくると、自分の屋敷についた。

さて、娘は家につくと、戸をたたいて、いつた。

「母さん、母さん、わたしをたすけておくれ。

わたしをうんだ母さん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾っぽのない野原の怪物よ」

母親が、「よかつたら、おまえの父さんのところにいきなさい」といった。娘ははしつていくと、自分の父親がいた。娘はいった。

「父さん、わたしをたすけておくれ。

わたしをうんだ父さん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾っぽのない野原の怪物よ」

父親が、「よかつたら、おまえのおじさんのところにいきなさい」といった。娘は自分のおじのところにいつて、たちどまり、いう。

「おじさん、わたしをたすけておくれ。

わたしのおじさん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾っぽのない野原の怪物よ」

おじが、「よかつたら、おまえの兄さんのところにいきなさい」といった。娘は自分の兄さんのところにいつて、うたった。

「兄さん、わたしをたすけておくれ。

わたしのお兄さん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾っぽのない野原の怪物よ」

兄さんが、「よかつたら、おまえの姉さんのところにいきなさい」といった。娘ははしつて、自分の姉さんのところにいつた。娘はいくと、たちどまった。娘は戸をたたいて、いう。

「姉さん、わたしをたすけておくれ。

わたしのお姉さん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾っぽのない野原の怪物よ」

姉さんは戸をひらかないといつた。よかつたら、父方のおばさんのところにいけといつた。娘は父方のおばさんのところにいつて、いう。

「おばさん、わたしをたすけておくれ。

わたしのおばさん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾っぽのない野原の怪物よ」

父方のおばさんは、「よかつたら、母方のおばさんたちのところはしつていきなさい」といった。娘ははしつて、母方のおばさんのところにいつた。怪物は娘のうしろからやつてくる。娘はいつて、たちどまった。娘はいつた。

「おばさん、わたしをたすけておくれ。

わたしのおばさん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾つばのない野原の怪物よ」

母方のおばが、「よかつたら、どこかいくところをさがしなさい。おまえは、わたしの小屋にははいれない」といった。

さて、娘ははしって、自分のすきな男のところに行った。娘がいくと、たくさんの男たちがいて、夜のときをすこしていた。娘はやつてくると、男の小屋の戸口のまんまえてたちどまり、いう。

「だれそれさん、わたしをたすけておくれ。」

わたしのだれそれさん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾つばのない野原の怪物よ」

さて、男が、「きこう。そとでなにかが話をしている」といった。

さて、男たちは耳をそばだてた。娘はまたしてもうたう。

「だれそれさん、わたしをたすけておくれ。」

わたしのだれそれさん、わたしをたすけておくれ。

野原の怪物よ。

尾つばのない野原の怪物よ」

さて、男は若者たちのなかからとびだしてきた。でてくると、そとに娘がいた。娘のうしろに怪物がいて、娘をつかまえようとしていた。男はすぐに怪物をたたいた。男と怪物は戦いはじめた。男と動物はどんだたか。とうとう、昼過ぎの礼拝の時間になった。

さて、男は、「昼過ぎの礼拝の時間になった。礼拝をしないのか。

うえをみて、太陽がどこにあるか、たしかめる」といった。怪物がうえをみると、男は怪物の首をきりおとした。首がきれてしま

った。(首がもとどおりにもどる。)男と怪物はまたしても、戦いはじめた。怪物は若者とずつとたたか。そのうちに、夕方の礼拝の時間になった。男は、「夕方の礼拝の時間になった。うえをみて、夕方の礼拝の時間になったか、たしかめる。夕方の礼拝をしよう」といった。

さて、男はまたしても、怪物の首をきった。男は怪物にさよならをした。娘は家にかえっていった。娘は男といっしょになり、結婚したとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーダマ・アルハジ・ベッロ。

イーサ、ガウンデレにて。この話は父方のおばからきいたとい

う)

127 王さまのよめさんになったカムリツル

カムリツルのお話をしてあげよう。

寒期がやってきた。鳥はうつつていき、カムリツルをあとにのこした。鳥がうつつていったあと、老女がそこをとりかかると、

カンムリヅルがいた。老女はカンムリヅルに、「どうしたのか」といった。カンムリヅルは、自分の仲間をみんなどこかにうつていったけれども、自分はずつていないといった。老女は、「よろしい、おいで」といった。老女はカンムリヅルをつれていき、おいでといった。

さて、王さまがよめさんをさがしている。老女が王さまのところへいくと、王さまは、「わしによめさんをさがしておくれ」といった。老女は、「よろしい」といった。

さて、王さまの家のものではでかけていき、王さまのよめさんをさがした。老女は、「わたしの小屋にきれいな女がいます」といった。ほんとうのこと、この女はカンムリヅルだった。

さて、老女はいくと、王さまにうそをついた。王さまは、「よろしい、その女をつれてきておくれ」といった。老女はいくと、女を夜のうちにつれてきた。

さて、老女と女はやってくると、小屋にはいった。女は化粧をした。老女たちは女をそこにおいておいた。王さまは、「よろしい。その女をつれてきなさい」といった。王さまの家のものたちはその女を王さまのところにつれてきた。女はベールをして、化粧をしていた。王さまは女をみて、「よろしい、その女はきれいだ」といった。王さまはやってくると、その女を屋敷においておいた。わかっているな。王さまは女のことなどあまり気にしていなかった。

さて、王さまは女にどんどん贈り物をする。そのうちに、もうすこしで、雨期というときになった。カンムリヅルの仲間たちもどつてきた。仲間たちは歌をうたっている。野原で、仲間たちはカンムリヅルをさがしている。

「村長の娘のカンムリヅルよ、

カンムリヅルよ、ルールルルルシ。

カンムリヅルよ。

カンムリヅルは髪をばさばさにしたまま、あんでいな

い。

お腹のところだけがしろい、村長の娘のカンムリヅルよ、

カンムリヅルは髪をばさばさにしたまま、あんでいな

い。

カンムリヅルよ。

お腹のところだけがしろい、村長の娘のカンムリヅルよ、

カンムリヅルよ」

とうとう、女はそれをきいて、うごく。

さて、王さまの家のものたちは王さまのよめさんがうごきだすのを見た。子どもたちはやしつていき、「王さまのよめさんは、カンムリヅルだ王さまのよめさんは、カンムリヅルだ」といった。

さて、王さまは、「そのをきなさい」といった。仲間たちは歌をうたつて、カンムリヅルをさがしている。カンムリヅルも、仲間

をさがしている。仲間たちはうたう。

「村長の娘のカムリツルよ、

村長の娘のカムリツルよ。

カムリツルは髪をばさばさにしたまま、あんでいな
い。

寒期をどこかですこすカムリツルが寒期をすこした。

カムリツルよ。

もうすこしで、雨期がやってくる。

カムリツルよ。

カムリツルは髪をばさばさにしたまま、あんでいな
い。

カムリツルよ」

さて、カムリツルがたちあがった。たちあがると、カムリツルははしっていき、とんでいった。仲間たちはうたう。

「カムリツルはいつてしまった。

お腹のところだけがしろい、村長の娘のカムリツルよ、

カムリツルはいつてしまった。

カムリツルはいつてしまい、いとまごいもしなかった。

カムリツルはどこかにいつてしまった。

村長の娘のカムリツルよ。

カムリツルは髪をばさばさにしたまま、あんでいな

い。

カムリツルよ」

(一九八三年一月二五日、語り手 ファートウマタ、ガウンデレにて)

128 カムリツルになった娘

ちいさなお話、ちいさなお話。さて、はやくやりなさい。語り手の頭のうえに、穴のあいたおおきな半截ヒョウタン、パシン。

ある男に娘ができた。娘はいつも、遊びにでかけ、ほかの子どもたちとおなじように昼にかえってこない。ほんとうのこと、娘はカムリツルにばけるのだった。そのうちに、とうとう娘はおおきくなり、結婚するが、母親は娘のことをしらなかった。娘は結婚し、むこさんを手にいれた。二人はいっしょにすみ、子どもができた。

さて、女は子どもをねかせた。むこさんは旅にでかけ、よめさんと自分の母親と自分の赤ん坊をあとのこした。男は旅にでかけた。

さて、昼がちかづくとき、女はでていつて、カムリツルの姿になった。女は川に行く。女はカムリツルたちと餌をつついてる。

さて、女の子どもがいない。女の義理の母親が女をさがし、

「なんだって、アッラーよ、息子のよめさんはどこにいったのだろう」という。義理の母親はずっと女をさがしている。子どもはなっている。ほんとうのこと、女は餌をたべているところから、自分の子どもがなくのをきいている。女はいう。

「わたしのカンムリツルよ、義理の姉妹よ、きたのか。

マカラがたべれば、わたしもたべる。

マカラがつつけば、わたしもつづく。

腹のしろい子どもよ、しずかにしなさい。

腹のしろいカンムリツルたちがとんでいけば、わたしはそこ

にいく」

そのうちに、義理の母親がなっている子どもをつれて女にちかづいてくる。女はいう。

「わたしのカンムリツルよ、義理の姉妹よ、きたのか。

マカラがたべれば、わたしもたべる。

マカラがつつけば、わたしもつづく。

腹のしろい子どもよ、しずかにしなさい。

腹のしろいカンムリツルたちがとんでいけば、わたしはそこ

にいく」

そのうちに、義理の母親たちがやってきた。イスラム教の先生が土をつかみ、カンムリツルの姿をした女にふりかけた。そうすると、女は人の姿にもどらず、カンムリツルの姿のままだった。女は

仲間のカンムリツルたちととんでいってしまったとき。

お話は、おしまい。ウサギの糞の蒸し焼きができた。

(一九六九一七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッラーイ・ウスマース、マルアにて)

129 傷痕のある男と結婚するのがいやなカンムリ

ツル

ちいさなお話、ちいさなお話。ンジャンナ・タボーイエル。

カンムリツルの娘が傷痕のない男とだけ結婚するといった。娘は何人もの男をみて、傷痕のない男と結婚した。娘の母親がやってきて、(娘の)小屋のうえにとまって、いった。

「クマー(カンムリツルの鳴き声)、きなさい。寒期をすごしにいこう。

寒期をすごそうとするカンムリツルたちはいってしまった。

乾期をすごそうとするカンムリツルたちはいってしまった」

娘はいった。

「ダムよ、わたしはいかない。

キリ・ダムダムダムよ、わたしはいかない。

キリダムよ」

娘の父親ももどっていき、娘の小屋のうえにとまって、いった。

「クマー、きなさい。寒期をすごしにいこう。

寒期をすごそうとするカンムリツルたちはいつてしまった。

乾期をすごそうとするカンムリツルたちはいつてしまった」

娘はいつた。

「キリ・ダムダムダムよ、わたしはいかない。

キリダムよ」

娘の兄さんがやってきて、妹の小屋のうえにとまって、いつた。

「クマー、きなさい。寒期をすごしにいこう。

寒期をすごそうとするカンムリツルたちはいつてしまった。

乾期をすごそうとするカンムリツルたちはいつてしまった」

娘はいつた。

「キリ・ダムダムダムよ、わたしはいかない。

キリダムよ」

娘のおじさんがやってきて、娘の小屋のてっぺんにとまって、いつた。

「クマー、きなさい。寒期をすごしにいこう。

寒期をすごそうとするカンムリツルたちはいつてしまった。

乾期をすごそうとするカンムリツルたちはいつてしまった」

娘はいつた。

「キリ・ダムダムダムよ、わたしはいかない。

キリダムよ」

わたしは、ここにいる。ほら、お話はあそこ。よからうが、わる

からうが、お礼をもらおうほうがよい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 バーバージョ、すなわち、ア

バカル、ケイニ村でかたつた)

130 子どもと動物(1)

お話、お話。モロコシの莖。いつて、こすりつけ、もう一度いつて、こする。聞き手の禿のまんなか。

ある男とそのよめさんとその子どもが一人いた。男たちは畑をつくっている。男とよめさんは野原に行く。男とよめさんが野原に行くとき、子どもをおいておく。食べ物をつくると、子どもがたべるように食べ物を土ナベのうえにおいておく(そうするとさめない)。

父親と母親がいつてしまうと、怪物がやってくる。怪物がいつた。

「マー・ムプムよ、マー・ムプムよ」

娘がいつた。

「はい、レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいつた。

「おまえさんの母親はどこにいる」

娘がいつた。

「母親は野原にいつた。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんの父親はどこにいる」

娘がいう。

「父親は野原にいった。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんのカタガユはどこにある」

娘がいう。

「カタガユは土ナベのうえにある」

怪物がいう。

「カタガユをたべてやろうか」

娘がいう。

「わたしは母親にたたかれる。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「わたしと、おまえさんの父親のどちらが、こわいか」

娘がいう。

「おまえさんがこわい。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物はカタガユをたべてしまい、どこかにいってしまふ。父親たちが家にかえってきた。そのつぎの日、父親たちは、また野原にでかけていった。父親たちは野原にいった。母親は食べ物をつくると、子どもがたべるように食べ物を土ナベのうえにおいておく。父親たちはでかけていった。そのつぎの日も、怪物がやってきた。怪物が

いう。

「マー・ムプムよ、マー・ムプムよ」

娘がいう。

「はい、レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんの母親はどこにいる」

娘がいう。

「母親は野原にいった。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんのカタガユはどこにある」

娘がいう。

「カタガユは土ナベのうえにある」

怪物がいう。

「カタガユをたべてやろうか」

娘がいう。

「わたしは母親にたたかれる。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「わたしと、おまえさんの父親のどちらが、こわいか」

娘がいう。

「おまえさんがこわい。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物はカタガユをたべてしまった。父親たちが家にかえってきた。

父親たちは、「娘よ、どうしておまえはやせるのか」といった。母親は、「わたしは家の番をする。あしたは野原にいかない」といった。母親は木にのぼった。父親はでかけていった。

さて、怪物がやってきた。怪物がいう。

「マー・ムプムよ、マー・ムプムよ」

娘がいう。

「はい、レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんの母親はどこにいる」

娘がいう。

「母親は野原にいった。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんの父親はどこにいる」

娘がいう。

「父親は野原にいった。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんのカタガユはどこにある」

娘がいう。

「カタガユは土ナベのうえにある」

怪物がいう。

「カタガユをたべてやろうか」

娘がいう。

「わたしは母親にたたかれる。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「わたしと、おまえさんの父親のどちらが、こわいか」

娘がいう。

「おまえさんがこわい。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

さて、怪物はやってくると、カタガユをたべてしまった。父親がかえつてくると、母親は木からおりて、「宿替えをしよう」という。女のむこさんは宿替えをしないと。女は、「怪物がやってきて、娘に迷惑をかけている。娘に食べ物をおいておいても、娘はたべられない。怪物がやってきて、食べ物をたべる」といった。男は、「わたしは日除けのうえにのぼらせてもらう。わたしはその怪物をみる」といった。

さて、母親は男をあとにのこして、野原にでかけていった。むこさんは日除けのうえにのぼった。怪物がやってきた。怪物はいう。

「マー・ムプムよ、マー・ムプムよ」

娘がいう。

「はい、レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんの母親はどこにいる」

娘がいう。

「母親は野原にいった。レンゲ・レンゲ・キリンデン」
怪物がいう。

「おまえさんの父親はどこにいる」

娘がいう。

「父親は野原にいった。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「おまえさんのカタガユはどこにある」

娘がいう。

「カタガユは土ナベのうえにある」

怪物がいう。

「カタガユをたべてやろうか」

娘がいう。

「わたしは母親にたたかれる。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「わたしと、おまえさんの父親のどちらが、こわいか」

娘がいう。

「おまえさんがこわい。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物は食べ物をたべた。娘の父親は日除けのうえにすわっていたが、やわらかいウンコをした。父親はこわがって、やわらかいウンコをした。

さて、怪物が、「なんの臭いがしているのか」といった。娘がい

う。

「それは父親の味噌のにおい。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「それをたべようか」

娘がいう。

「わたしは父親にたたかれる。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「わたしと、おまえさんの父親のどちらが、こわいか」

娘がいう。

「おまえさんがこわい。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物は父親のウンコをたべてしまった。娘は穀物倉のしたまで、ヒョウタンの筒をもっていった。怪物がいう。

「このヒョウタンの筒はだれのものか」

娘がいう。

「このヒョウタンの筒は父親のもの。レンゲ・レンゲ・キリン

デン」

怪物がいう。

「このヒョウタンの筒をふいて（おそらく、筒を吹いて音をだす）やろうか」

娘がいう。

「わたしは父親にたたかれる。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物がいう。

「わたしと、おまえさんの父親のどちらが、こわいか」
娘がいう。

「おまえさんがこわい。レンゲ・レンゲ・キリンデン」

怪物はヒョウタンの筒をふいた。

さて、怪物はいつてしまった。娘の父親はよめさんがかえってくるまでに、荷物をまとめてしまっていた。父親は、「あすは、宿替えしよう。怪物がきて、わしらをくおうとしている。わしらはこわい」といった。

さて、一家は荷物をまとめて、どこかにいつてしまった。こうして、この人たちはここにすみだしたとき。

お話は、おしまい。

(語り手不明。しかしながら、物語のなかにムプム語のマー・ムプムという表現がある。したがって、もともとこの話はガウン・デレの周辺の話であるといえる)

131 子どもと動物(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

こういうことだ。あるちいさな男の子が母親と父親とすんでいた。いつも、両親は畑にでかけていき、子どもをほっておく。いつ

も、両親は畑にでかけていき、子どもをほっておく。子どもは家にいる。子どもはひとり、家にいる。両親はでかけていくとき、子どもに食べ物をやる。両親はその食べ物を日除けのうえにおいておく。昼になると、子どもはそれをたべる。

さて、野原の動物がやってくると、その臭いをかいだ。いつも、両親はでいき、子どものために、たべるものを日除けのうえにおいておいてやる。子どもはやってくると、それをとって、たべる。さて、野原の動物がやってくるといいう。

「ジエンゲレドゥ・ジエンゲレドゥ」

子どもはそれにこたえて、いう。

「ジエンゲレドゥ・クルンデ」

野原の動物がいう。

「おまえさんの父さんは、どこにいるか」

子どもがいう。

「父さんは、野原にいつた。ジエンゲレドゥ・クルンデ」

野原の動物がいう。

「おまえさんの兄さんは、どこにいるか」

子どもがいう。

「兄さんは、野原にいつた。ジエンゲレドゥ・クルンデ」

野原の動物がいう。

「おまえさんの母さんは、どこにいるか」

子どもがいう。

「母さんは、野原にいった。ジエンゲレドゥ・クルンデ」

野原の動物がいう。

「おまえさんの食べ物、どこにあるか」

子どもがいう。

「食べ物、日除けのうえにある。ジエンゲレドゥ・クルンデ」

デ

野原の動物がいう。

「食べ物をたべようか」

子どもがいう。

「ほら、ここにある。たべなさい。ジエンゲレドゥ・クルンデ」

デ

野原の動物は食べ物をたべる。いつも、野原の動物は、きかたをおぼえて、やってくる。食べ物、野原の動物は、きかたをおぼえて、やってくると、子どもの家で食べ物をたべる。この野原の動物はならぶものがないほどおおきかった。この野原の動物は人をこわがらせた。この野原の動物は人びとをすっかりこまらせた。野原の動物はいつもやってくる。いつもやってくる。いつもやってくる。子どもはやせていく。

さて、ある日、子どもとその親たちはずっと家にいた。父親と母親はやってくると、水ガメのなかに身をかくした。両親はやってき

て、水ガメのなかにかくれた。二人はかくれた。二人は水ガメのなかにかくれた。

さて、野原の動物がやってくる。子どもをよんでいる。

「ジエンゲレドゥ・ジエンゲレドゥ」

子どもはそれにこたえて、いう。

「ジエンゲレドゥ・クルンデ」

野原の動物がいう。

「おまえさんの父さんは、どこにいるか」

子どもがいう。

「父さんは、野原にいった。ジエンゲレドゥ・クルンデ」

野原の動物がいう。

「おまえさんの兄さんは、どこにいるか」

子どもがいう。

「兄さんは、野原にいった。ジエンゲレドゥ・クルンデ」

野原の動物がいう。

「おまえさんの母さんは、どこにいるか」

子どもがいう。

「母さんは、野原にいった。ジエンゲレドゥ・クルンデ」

野原の動物がいう。

「おまえさんの食べ物、どこにあるか」

子どもがいう。

「食べ物は、日除けのうえにある。ジエンゲレドゥ・クルン
デ」

そのとき、父親はよこになって、やわらかいウンコをし、ウンコで水ガメをいっばいにする。水ガメをウンコでいっばいにしてしまった。父親も、母親も、二人ともふるえている。

さて、子どもはたちあがると、野原の動物に食べ物をやった。野原の動物はたべものをとると、それをたべている。両親は野原の動物をころそうとして、そこにいた。両親は野原の動物をみると、小屋のむこうにでてしまった。二人はでてしまうと、荷物をまとめて、にげていく。野原の動物はたべたりなかつたので、カユをのんだ。

さて、野原の動物は満腹し、小屋をつぶした。とおくに、二人がにげていき、(川につくと)川に網をわたしてあるのをみた。両親は網のうえをあるいて、川をわたった。野原の動物はやってきて、網のうえにのぼろうとしたが、網から川におちて、死んでしまったとき。

このお話もおしまい。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーダドゥ・ルフアイ、ガウンデレにて。エウォンド族の女性からきいたという)

132 子どもと動物(3)

たくさんさんの娘がいた。娘たちは年頃だった。娘たちは野原へなにかをつみにいった。

さて、娘たちは野原にいき、家にかえってくる。娘たちはやってくると、あるおおきな岩のうえにすわった。娘たちはやってくと、岩のうえにすわった。

さて、娘たちはみんなすわって、やすんだ。

さて、娘たちは、「だれが一番最初にたちあがるか、競争してみよう」といった。

さて、娘たちはみんなたちあがった。一人の娘はみんなのあとになつた。娘は一生懸命おきあがろうとしたが、尻が岩にひつついてしまった。

さて、娘たちはいくと、その娘の母親と父親にそのことをつたえた。娘の母親と父親がやってきた。母親と父親はやってくると、娘のために岩のうえに仮小屋をたてた。夜があけて、朝になると、母親と父親は娘のために食べ物などをもってくる。夕方になると、食べ物などをもってくる。ハイエナは娘のことがわかった。ハイエナはそこにいた。夕方になると、ハイエナがやってきて、たちどまる。ハイエナは、「どうも」という。娘はハイエナに、「よろしい」という。ハイエナがいう。

「はいろいろか」

娘はいう。

「はいりなさい、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナが小屋にはいる。ハイエナがいう。

「おまえさんのカタガユはどこにあるか」

娘はいう。

「その棚のうえにある、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナがいう。

「おまえさんの母親はどこにいるか」

娘はいう。

「母さんは畑にでかけていった、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナがいう。

「これをたべようか」

娘はいう。

「たべなさい、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナはカタガユをとると、それをたべてしまう。

さて、ハイエナは娘にたずねる。

「おまえさんのカユはどこにあるか」

娘はいう。

「その棚のうえにある、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナがいう。

「それをもうか」

娘はいう。

「のみなさい、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナはそれをみんなのんでしまう。ハイエナは小屋のそとにでて、いってしまふ。娘の母親たちがやってくると、娘はだんだんやせていつている。

さて、またしても、そのつぎの日も、ハイエナがやってくる。ハイエナがいう。

「はいろいろか」

娘はいう。

娘はいう。

「はいりなさい、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナが小屋にはいる。ハイエナがいう。

「おまえさんのカタガユはどこにあるか」

娘はいう。

「その棚のうえにある、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナがいう。

「これをたべようか」

娘はいう。

「たべなさい、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナはカタガユをとると、それをたべてしまふ。ハイエナは琺瑯引きの容器の底までさらえてしまふ、たずねる。

「おまえさんのカユはどこにあるか」

娘はいう。

「その棚のうえにある、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナがいう。

「それをのもうか」

娘はいう。

「のみなさい、レンゲレンゲ・クルンデン」

いつもずっと、ハイエナはこのようにする。娘はだんだんやせていく。

さて、母親たちがやってきて、娘にそのわけをたずねた。

さて、娘は、「こういうことで、ハイエナがやってきて、わたしの食べ物をたべてしまうためなの」といった。母親は、「よろしい」といった。母親はやってくると、かくれた。父親はやってくると、小屋のうえにのぼり、かくれた。ハイエナはやってきて、たちどまった。ハイエナはやってくる。ハイエナがいう。

「はいろいろか」

娘はいう。

「はいりなさい、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナが小屋にはいる。ハイエナがいう。

「おまえさんのカタガユはどこにあるか」

娘はいう。

「その棚のうえにある、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナがいう。

「これをたべようか」

娘はいう。

「たべなさい、レンゲレンゲ・クルンデン」

ハイエナはカタガユを棚からおろして、すわって、たべてしまった。

さて、娘の母親はこわくなってきた。むこうのほうに、かくれている。かくれているところで、こわくて、体がウニコだらけになってしまった。ハイエナがいった。

「なんのにおいがしているのか」

娘はいう。

「それは母さんのタイガーナットでつくった味噌、レンゲレン

ゲ・クルンデン」

さて、ハイエナははしって、小屋のそとにでた。

さて、父親は、ハイエナが小屋のそとにでていく音をきくと、槍をもっておりると、ハイエナをつきさして、ころしてしまったとさ。

このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーダマ・アルハジ・ベッロ・イーサ、ガウンデレにて)

133 妻と夫

お話、お話。タボ・カ・ボーエ。

このお話はこういうこと。女とそのむこさんがいた。二人はハネアリ（食用になる）をとりに行った。ハネア리를とりに行く、女は茂みをきれいに掃除し、そこに子どもをよこしておいた。二人はハネアリをつかまえている。女はハイエナがやってくるのをしらなかった。ハイエナはしずかにあるいてくると、子どものところへたちどまった。ハイエナはたちどまって、もどっていった。ハイエナはいくと、茂みのむこうでたちどまり、人に姿をかえた。化け物は、「女よ、おまえさんはどうして、子どもをねかせておいたのか。子どもがいないが」といった。女は、「はい。わたしはハネアリをつかまえている」といった。ハイエナは、「子どもの名前は何なのか」といった。女は、「ウディニ（すてた）」という意味」といった。化け物は、「よろしい。ウディニというのか。ほかの名前は」といった。女は、「マイ・ガリ」といった。化け物は、「よろしい」といった。化け物はずっといき、ころがって、ハイエナの姿にもどった。ハイエナはしずかにあるいて、もどつてくると、子どもをつれて、どこかにいってしまった。ハイエナはいくと、子どもを穴にいれた。女はハネアリをつかまえておえる、子どもをみにいった。子どもがいなかった。

さて、女は、「わたしの主人よ、なにかが子どもをさらっていった」という。男は、「それでは、子どもをつれていったのはハイエナだ。それでは、なんとかしよう」といった。女は、「いいわ。そうしよう」といった。女はたちあがり、家にかえって、準備をする。もどつてきて、ハイエナのあるいていった道をつけていった。女はハイエナの足跡をつけていった。女は歌をうたっている。

さて、女はハイエナがたっていた茂みのむこうでたちどまった。さて、女は、自分の子どもをよぶ。

「ウディニよ、ウディニよ、きて、乳をのみなさい。」

ウディニよ、ウディニよ、きて、乳をのみなさい。

マイ・ガリよ、きて、乳をのみなさい。」

子どもはなにもいわない。またしても、女がもどってきた。女はいう。

「ウディニよ、ウディニよ、きて、乳をのみなさい。」

ウディニよ、ウディニよ、きて、乳をのみなさい。

マイ・ガリよ、きて、乳をのみなさい。」

子どもは大声をあげた。大声をあげて、子どもは、「あれは、わたしの母さんの声ではない」といった。子どもは、「あれは、わたしの母さんの声ではない」という。女は、もどっていった。ハイエナは野原からかえつてくると、たちどまった。ハイエナは子どもをよぶ。

「ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

マイ・ガリよ、きて、乳をのみなさい」

子どもは穴からでてきて、ハイエナの乳をのんで、満腹した。子どもは穴にはいった。ハイエナはいつてしまった。母親がもどつてきて、いう。

「ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

マイ・ガリよ、きて、乳をのみなさい」

子どもは、「なんだつて、あれはわたしの母さんの声ではない」といった。母親はもどつていった。母親たちは学者のところに行った。女はいくと、学者に、「こういうことなのです。わたしはハネアリをとりについて、子どもをねかせておきました。ハイエナは子どもをさらつてしまいました。でも、ハイエナは子どもを自分のものにしてしまいました。子どもは、わたしの声がわかりません。ハイエナの声をきくと、その乳をのむのです」といった。学者は、「よろしい。おまえさんは、おまえさんの子どもをとりもどそうとするなら、わたしになにをくれればよいか知っているな」といった。女は、「なんですか」といった。学者は、「いつて、ツッチテナとよばれるアリをつかまえておくれ」といった。女は、「ツッチテナとはなんですか」という。学者は、「頭をまわすアリのこと

だ」といった。女は、「よろしい」といった。女はいくと、ツッチテナをつかまえて、ころした。

さて、学者は、「いきなさい。いつて、その茂みのむこうにたちなさい。そのツッチテナの頭をとり、それをうしろになげ、その尻をまえのほうになげなさい。歌をうたうのだ」といった。女は、「よろしい」といった。女はいつた。女はツッチテナをとり、その頭をうしろになげ、尻をとると、まえのほうにほかした。女はうたつた。

「ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

マイ・ガリよ、きて、乳をのみなさい」

さて、子どもが穴からでてきた。子どもがでてくると、母親は子どもをつかんだ。子どもをつかまえると、にげていつた。女は子どもをつれて家にかえつた。女が家にかえると、ハイエナがかえつてきた。ハイエナはかえつてくると、歌をうたつた。

「ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

マイ・ガリよ、きて、乳をのみなさい」

なんの音もしなかつた。ハイエナはもう一度うたつた。なんの音もしなかつた。ハイエナは、「きつと、人間たちが子どもをつれていつたのだ」といった。ハイエナはどん道があるいつた。ハ

イエナはどんどんあるいていく。とうとう、ハイエナは子どもの父親のところについた。ハイエナはいくと、家のむこうでたちどまり、うたう。

「ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

ウデイニよ、ウデイニよ、きて、乳をのみなさい。

マイ・ガリよ、きて、乳をのみなさい」

子どもは、家のなかから、返事をし、でていこうとする。ハイエナはちかづいてきた。ハイエナは子どもをつかまえた。母親も子どもをつかまえた。ハイエナと女は子どもをひっぱっている。

さて、子どもの父親は矢をとると、ハイエナを射た。ハイエナはにげて、かえっていったとき。

さて、ほら、お話はそちらにいき、わたしはここにいる。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ハデイージャ、ケイニ村で。

この話は母方の祖母からきいたという)

134 男の子とへび

ある男がいた。男は女たちをめとった。女たちはライバル妻になつた。二人はライバルだったが、一人はきれいな娘をうんだ。もう一人は子どもをうまなかつた。

さて、女たちは水ガメをもち、川にいった。二人は水汲みにいっ

た。

さて、子どもをうんだ女は道をそれ、ウンコをしようとした。女は、「おねがい、あなたが水をくむとき、わたしにもくんでおくれ。あなたがさきに家にかえってもよいから、水をくんでおいておくれ」という。

さて、わかるな、二人はライバルの仲だ。

さて、女は自分の水ガメのなかに水をくんだ。水をくんでおくれ、くるからといった女の水ガメに、女はその半分を砂でみたし、あとの半分に水をすこしいれた。女は水のはいった自分の水ガメを頭にのせ、自分たちの屋敷にむかつて、かえっていった。子どもをうんだ女はいつて、ウンコをし、自分の水ガメを頭にのせようとした。でも、水ガメに砂がはいり、水がほんのすこしはいつていただけだったので、一生懸命になって、もちあがようとでも、もちあがらなかつた。女は、「水のなかにいるものはみんなでてきて、わたしのためにこれを頭にのせておくれ」という。ちいさなカエルがピョンピョンとしながらでてきて、水ガメをもちあがようとするが、できなかつた。女は、カエルにどこかにいつてしまうようにといつた。女はおなじことをいう。女は一生懸命になるが、もちあがられなかつた。女は、「水のなかにいるものはみんなでてきて、わたしのためにこれを頭にのせておくれ」という。魚がはねながらでてきて、水ガメをもちあがようとするが、できなかつた。ほんとう

のこと、女は、ライバルである女が、水ガメのなかに砂とほんのすこしの水をいれておいたのがわからなかった。

さて、女は、「水のなかにいるものはみんなでてきて、わたしのためにこれを頭にのせておくれ」といった。

さて、おおきなヘビがでてきて、「バップ・バップ・バップ・バップ・チット、ローン・ローン・ジッピン・ジッピン、わたしがそれをおまえさんの頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるのか」といった。女は、「おまえさんがそれをわたしの頭にのせてくれたら、ニワトリをあげる」といった。ヘビは、「ニワトリしかくれないのなら、頭にのせない、いつてしまう」という。女は、「もどっておいで、きてわたしの頭のうえにのせておくれ」といった。ヘビは、「バップ・バップ・バップ、頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるのか」という。女は、「おまえさんがそれをわたしの頭にのせてくれたら、雌ヒツジをあげる」という。ヘビは、「雌ヒツジしかくれないのか。わたしの尾っぽをおして、もちあげてみなさい。雌ヒツジの群がいくついるか」という。女は、「わたしはわからない」といった。怪物は水ガメをもとにもどし、どこかにいきはじめる。女は、「水のなかにいるものはみんなでてきて、わたしのためにこれを頭にのせておくれ」という。怪物は、「バップ・バップ・バップ・バップ、わたしがそれをおまえさんの頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになに

をくれるのか」という。女は、「おまえさんがそれをわたしの頭にのせてくれたら、ウシを四頭あげる」といった。怪物は、「わたしの尾っぽをもちあげてみなさい。ウシ四頭をもらうために、わたしの力をだしきらなければならぬのか」という。おおきなヘビは身をひるがえし、いつてしまおうとする。女は、「水のなかにいるものはみんなでてきて、わたしのためにこれを頭にのせておくれ」という。怪物は、「バップ・バップ・バップ、わたしがそれをおまえさんの頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるのか」といった。女は、「わたしのライバルの女をあげる」という。怪物は、「よし、人一人か。その女は年をとっているか、わかいか」という。女は、「すこしは年をとっている」といった。怪物は、「わたしはいやだ」という。女は、「それでは、結婚してよい年頃になっているわたしの娘をあげる」という。怪物は、「よろしい」といった。怪物は女に、「おまえさんの水ガメにはいつている水をながしなさい。べつの水をくむのだ。おまえさんは、それを頭にのせられる。おまえさんといっしょにやってきた女が、水をくみ、おまえさんの水ガメを砂でいっぱいにしたから、もちあげられないのだ」といった。女は水ガメにはいつていた砂をあげてしまい、水をくんで、それを頭にのせて、かえつてきた。怪物がやってくる。女ははしって、村のそばまでやつてきた。怪物がやってくる。女はは

さて、娘がでてきて、怪物をみた。

さて、怪物はやってくると、娘のあとをあるいていく。娘はいくと、小屋にはいり、「父さん、そこに怪物がいる。たすけてちょうだい。そこに怪物がいる。たすけてちょうだい」といった。

さて、父親は娘に、「なんだって」といった。父親はでてくると、怪物をみて、どうしようもないのがわかった。怪物は、「わたしはその娘からけっしてはなれない。おまえさんの母親にもらったのだ」といった。父親は娘に、「娘よ、はしって、おまえのおじさんのところにいきなさい」といった。娘がいくと、おじさんがいた。娘は、「おじさん、そこに怪物がいる。たすけてちょうだい」という。

さて、娘のおじさんが小屋のなかからそとをみると、怪物がいた。おじさんは、「わたしにはなにもできない。はしって、おじさんのところにいきなさい」といった。娘はおじさんのところにいった。おじさんは、「こい、孫娘よ、それがおおきな怪物でも、おまえをたすけてやる」といった。娘は、おじさんのところにいった。

さて、怪物は娘のおじさんのところについた。おじさんは、「はしって、おまえのおじさんのところにいきなさい」といった。娘ははしって、おじさんのところにいった。おじさんが小屋のなかからそとをみると、怪物がいた。おじさんは、「娘よ、はしって、姉さんのところにいきなさい」といった。娘ははしって、姉さ

んのところにいった。姉さんは怪物をみて、「わたしにはなにもできない。はしって、おばさんのところにいきなさい」といった。娘はおばさんのところにいった。娘は、「おばさん、そこに怪物がいる。怪物はわたしをたべるといった」といった。おばさんは、「わかるかな、娘よ。わたしはおまえにおしえてやる。わたしは女だけれど、どうしたらよいかおしえてあげる。おまえと結婚したがっている男がいなか」といった。娘は、「いる」といった。おばさんは、「それでは、その人のところまでまっすぐにはしっていきなさい」という。娘はその男のところに行くのがはずかしかったけれども、はしって行って、たちどまり、かくれた。

さて、男がでてきた。男は若者たちといた。若者たちは小屋にたたくさんいた。

さて、男はでてきて、怪物をみた。

さて、男は娘を入り口の小屋のなかにおしこんだ。男は短刀をぬき、やってくると、怪物とたたかいはじめた。男は朝から昼まで、怪物とたたかった。

さて、怪物は男に、「なんだって、朝から昼まで、たたかっている。おねがいだ、アツラーのゆえに、お日さんがどのへんにあるかみておくれ」という。

さて、若者は怪物に、「わたしはお日さんをみる事ができない。おまえさんがみればよい」という。怪物がうえをみた。若者は怪物

その容器を地面におきなさい。おまえさんのために頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるか」という。女は、「わたしはおまえさんに非フルベ族の奴隷をあげる」という。大蛇は、「おまえさんの非フルベ族の奴隷はわたしの父親の非フルベ族の奴隷にまさるといふのか。その容器を地面におきなさい」という。女は、「わたしはルドヨという子どもがいる。ルドヨがいる。ルドヨはたくさんの雌ウシと黄金をつけている雄ウシをもっている。ルドヨは雄ウシの頭の皮でできたムチをもっている。わたしはおまえさんにルドヨをあげる」といった。大蛇は、「よろしい」といった。大蛇は女の頭に水のはいつた容器をのせてやった。

さて、女が家にかえつてくると、ルドヨがいた。女は、「ルドヨよ、わたしが水汲みにいったところには、ウシにたべさせるにはちょうどよい草がある。おねがい、あす、おまえはそこにおまえのウシをつれていって、その草をたべさせなさい」といった。男の子は、「わかった」といった。男の子は幼友たちをみて、「母さんがどこそこという場所によい草があるのをみた」といった。どこそこという場所によい草があるのをみた」といった。朝になると、幼友たちは男の子よりさきに草のあるところにかけていった。男の子たちはでかけていった。日がすこしあがると、男の子たちはでかけていき、水のなかにウシをはなした。大蛇は一人の男の子に、「おまえさんはルドヨか」といった。

さて、男の子はいった。

「ぼくは、ルドヨではない。

ルドヨは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもっている。

ルドヨは、よい糸をつかった布でできたズボンをもっている。

ルドヨは、黄金をつけている雄ウシをもっている。

ルドヨ」

大蛇は、「水をのませて、ここからでていきなさい」という。男の子は水をのませて、そこからでていった。もう一人の男の子は自分のウシをつれてきて、水のなかにいれた。大蛇は、「おまえさんはルドヨか」とたずねた。

「ぼくは、ルドヨではない。

ルドヨは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもっている。

ルドヨは、よい糸をつかった布でできたズボンをもっている。

ルドヨは、黄金をつけている雄ウシをもっている。

ルドヨ」

大蛇は、「水をのませて、ここからでていきなさい」という。男の子は水をのませて、そこからでていった。もう一人の男の子は自分のウシをつれてきて、水のなかにいれた。大蛇は、「おまえさんはルドヨか」という。

「ぼくは、ルドヨではない。」

ルドヨは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもっている。

ルドヨは、よい糸をつかった布でできたズボンをもっている。

ルドヨは、黄金をつけている雄ウシをもっている。

ルドヨ

さて、日がたかくのぼってきた。ルドヨがやってきた。大蛇は、「ルドヨよ」とよんだ。ルドヨがいった。

「ぼくは、ルドヨだ。」

ルドヨは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもっている。

ルドヨは、よい糸をつかった布でできたズボンをもっている。

ルドヨは、黄金をつけている雄ウシをもっている。

ルドヨだ」

大蛇はおきあがった。ルドヨと大蛇はどんだたかかった。とうとう、昼過ぎの礼拝のときになった。大蛇が、「太陽をみてみなさい。礼拝をしなければならぬ」といった。ルドヨは、「ぼくは礼拝をしない」といった。大蛇が、「わたしらは男と男なのに。わたしは太陽をみる。戦いがおわったとき、礼拝をしよう」という。大蛇は鎌首をもたげた。ルドヨは大蛇の首をきりおとした。黄金をつけている雄ウシは大蛇の首をけりとばす。ルドヨは雄ウシの頭の皮で

きたムチでうつ。ルドヨは剣できる。ルドヨは大蛇をころし、そこにほっておいた。ルドヨの父親は息子をずつとさがしている。父親はよめさんに、「おまえは息子にどの川にいったらよいといったのか」といった。よめさんは継子をけしてしまおうとして、わけのわからないことをいっている。女は、「あの子はどこにいったのだろうか。どこにいったのだろうか」といいう。ルドヨは大蛇をころしてしまった。

さて、ルドヨはヘビの肉をこまかくきり、草にさして、手にもった。男の子は家にかえってきた。父親は、「ルドヨよ、どこにいったのか。夜明けにかえってくるとは」といった。男の子は、「ぼくはとおくまで、ウシに草をたべさせにいった。だから、家にはやくかえれなかった」といった。男の子は肉をとると、継母にやった。男の子は、「ここに、野原でころした動物の肉がある。ぼくはそれをきりとり、もってかえってきた。この肉を日がほるまでに、火であぶって、たべればよい」といった。継母はそれをとると、火にほりこんで、口にいれて、ばくつとたべた。ヘビの肉は喉仏のところをやつてくると、ひつかかつてしまった。家のものは一生懸命になった。継母の目がとびだしてきた。

さて、男の子は父親に、「きておくれ。いこう。継母がわたしにしかしたことをみておくれ」といった。二人がいくと、おおきなヘビがおおきな固まりになっていた。二人がもどるまでに、継母は

死にかけていた。男の子は、「父さんが継母をころさなければ、ぼくは屋敷にはいらぬ。ぼくは屋敷にはいらぬ。あの女はぼくがいきっているのをにくんでいた。あの女はいくと、ぼくを父さんのみたものにあわせた」といった。二人がかえってきて、継母をころすまえに、ヘビの肉は継母の喉につまり、継母をころしてしまった。

さて、家のものたちは女を埋葬した。ルドヨが屋敷にはいったとさ。
レにて

136 ヤーワツロとワニ

ちいさなお話、ちいさなお話。

あるところに一人の女がいた。女はたちあがり、川にいった。女はいくと、水をくんだ。水をくみ、それを自分の琺瑯引きの容器にいれた。女はたつて、まった。女はだれかがやってきて、その水のはいつた容器を頭にのせてもらえぬものとおもっている。だれにも、頭にのせてもらえなかつた。女はずっとたっている。だれにも、頭にのせてもらえなかつた。

さて、女は、「水のなかにいるものはみんなできてきて、これをわたしの頭のうえにのせておくれ」という。カエルがでてきて、一生

懸命になるが、のせることができなかつたので、水のなかにもどつていった。女はまたしても、たちどまり、「水のなかにいるものはみんなできてきて、これをわたしの頭のうえにのせておくれ」といった。ヘビがでてきて、一生懸命になるが、のせることができなかつたので、水のなかにもどつていった。女はまたしても、「水のなかにいるものはみんなできてきて、これをわたしの頭のうえにのせておくれ」といった。ワニがでてきた。

さて、ワニは女に、「わたしがおまえさんの頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるか」という。女は、「おまえさんがそれをわたしの頭にのせてくれたら、わたしはおまえさんに父親のウシをあげる」といった。

さて、ワニは女に、「なにをいつているのか、おまえさんの父親のウシはわたしの父親のウシよりおおいとおもっているのか。わたしがそれをおまえさんの頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるか」という。女は、「おまえさんがそれをわたしの頭にのせてくれたら、わたしはおまえさんに父親のウシをあげる」といった。ワニは女に、「なにをいつているのか、おまえさんの父親のウシはわたしの父親のウシよりおおいとおもっているのか。わたしがそれをおまえさんの頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるか」という。女は、「おまえさんがそれをわたしの頭にのせてくれたら、わたしはおまえさんに父親のヤ

ギをあげる」といった。ワニは女に、「なにをいつているのか、おまえさんの父親のヤギはわたしの父親のヤギよりおおいとおもっているのか。わたしがそれをおまえさんの頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるか」という。女は、「おまえさんがそれをわたしの頭にのせてくれたら、わたしはおまえさんに父親のニワトリをあげる」という。ワニは、「なにをいつているのか、おまえさんの父親のニワトリはわたしの父親のニワトリよりおおいとおもっているのか。わたしがそれをおまえさんの頭にのせてやったら、おまえさんはわたしになにをくれるか」という。女は、「わたしはおまえさんにわたしの子どもをあげる」といった。

さて、ワニは水のはいった容器と女を自分の頭のうえにのせて、「おまえさんの子どもとはだれか」という。女は、「わたしのヤーワツロという子どもだ」という。(ワニは女をほんでいく。) 女はワニに、「おろしておくれ、おろしておくれ」という。ワニは女をおろした。ワニは女に、「その子どもはいつくるのか」という。女はへびに、「わたしが家にかえったら、わたしはその子どもをくるようにさせる。おまえさんはその子どもを水のなかでまつのだ。その子どもはくる」という。ワニは、「よろしい」といった。女には、子どもがなかった。この子どもは女と夫をとにもするライバルの子どもだった。女は家にかえった。ワニはいくと、女をおろした。女は水を水ガメにあけた。

さて、女は自分と夫をとにもするライバルの子どもに、「ヤーワツロよ、おまえはなにそれという川に行くのだ。そこにはたいへんたくさん草がある。おまえはそこにいつて、おまえのウシに草をたべさせなさい。おまえのウシはお腹がいつぱいになるだろう。ウシはたいへんふとり、この村にいるどのウシよりおおきくなるだろう」という。ヤーワツロは、「わかった」という。ヤーワツロはたちあがると、自分のウシをさきにあるかせ、川にいき、ウシに草をたべさせている。ヤーワツロのウシは草をたべている。そのうちに、ヤーワツロは川のなかでなにかがうごくのをかんじた。さて、ワニはいう。

「ヤーワツロは、

色がついている、頭がしろいウシのところにいそぐ。

首に飾りをつけ、

額に鉄の飾りをつけ、

腰にはしつかりと帯をしめている。

ウシの持ち主よ、たちどまり、みるのだ」

さて、ヤーワツロは、「全能のアツラーよ、水のなかからなにがほくに歌をうたっているのか」という。男の子はまたしても、耳をそばだてた。男の子はワニがいうのをきく。

「ヤーワツロは、

色がついている、頭がしろいウシのところにいそぐ。

首に飾りをつけ、
額に鉄の飾りをつけ、

腰にはしっかりと帯をしめている。

ウシの持ち主よ、たちどまり、みるのだ」

男の子はそれをきいて、「アッラーよ、水のなかからなにがぼくに歌をうたっているのか」といった。男の子はたちどまり、あつちこつちをみているが、なにもみえなかった。

さて、男の子はまたしても、なにかが歌をうたうのをきいて、あつちこつちをみているが、なにもみえなかった。

さて、ワニはヤーワツロをひっぱつていき、水のなかにほうりこんだ。男の子を水のなかにほうりこむと、ワニは男の子をのみこんでしまった。男の子はのみこまれると、ワニの腹のなかにいた。男の子は腰に短刀をつけていた。

さて、男の子は短刀をぬくと、ワニの腹をさいた。ワニは死んでしまった。男の子はワニの腹からでてきた。

さて、男の子はワニの肉をきりと、自分の袋のなかに入れた。男の子は自分のウシをさきにあるかせた。男の子はウシをおつて、家にかえつていった。男の子の母親のライバルはすわっていたが、ヤーワツロがウシといっしょにいるのをみて、「ヤーワツロよ」という。ヤーワツロは返事をした。女は、「おまえかい」という。ヤーワツロは、「うん」という。女は、「家にかえつてきたのか」とい

う。ヤーワツロは、「かえつてきた」といった。女は、「家にかえつてきたのか」という。ヤーワツロは、「うん、かえつてきた」といった。女は、「おまえはわたしがおまえにいつてやった川にいかにかつたのかい」という。ヤーワツロは、「そこまでいつて、家にかえつてきた」といった。女は、「おまえはそこにいつていない」といった。ヤーワツロは、「ぼくはそこにいつた。ぼくはおしえてもらつたところにいつた。そこにいつて、家にかえつてきた。ぼくのウシがどんなウシだったかみていなかつたかな。ほら、ここに肉がある。ぼくらのために手にいれた。ほら、肉がある。なんとかして、この肉をぼくらのために料理しておくれ」といった。ヤーワツロの母親のライバルは、「よろしい」といい、やつてくると、その肉をきり、料理した。ヤーワツロは、「自分の分をたべておくれ。ぼくののをこしておいておくれ」とおいつた。女はその肉をとり、その肉をどんだんたべていつた。肉が一切れのこつた。女はそれをとつて、口にいれた。

さて、骨が喉にひっかかつて、女は、息ができなくなつて、死んでしまったとき。

お話は、ながく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二一日、語り手 マータ・アルハジ・ベッロ・イーサ、ガウンデレにて。この話は、マンマという父方のおばからきいたという)

